

ユニテ 37

日本・ロマン・ロランの友の会・創立60周年記念



フリーツォン
傅聰 (二〇〇九)

財団法人 ロマン・ロラン研究所

2010. 4

目次

犠牲の宗教への問い

—— ロマン・ロランの思い出に寄せて…………… 高橋哲哉…………… 1

ロマン・ロラン（一八六六一一九四四）音楽学者

西垣正信レクチャー・ギターコンサートに寄せて…………… マティアス・ロジェ…………… 26

郁子・イワノヴィッチ
大出 學 共訳

フリー・ツォン（傅聡）ピアノ・リサイタル

—— 三つの文明の出会い ——

中国 日本 ヨーロッパ…………… 31

演奏者・傅聡フリーツォン氏のプロフィール…………… 31

傅聡フリーツォンさんにきく…………… 西成勝好…………… 33

『フリー・ツォン（傅聡）ピアノ・リサイタル』を聴いて…………… 中西明朗…………… 34

深い魂の叫び

—— ロランからフー・レイへ、そしてフー・ツォンへ —— …… 森内依理子 …… 37

『最後の扉の敷居で』から 9 …… 村上光彦 …… 43

青木やよひ氏追悼 …… 永田和子 …… 62

ロマン・ロラン研究所の活動報告 …… 64

研究所だより 二〇〇九 …… 64

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書 …… 74

二〇〇九年度 賛助会員、寄付者名簿 …… 75

『ユニテ』編集を終えて …… 76

犠牲の宗教への問い

—— ロマン・ロランの思い出に寄せて

高橋 哲哉

皆さんこんにちは。高橋哲哉です。

最初、ご紹介いただきました弁護士の和田さんからロマン・ロラン友の会で講演を、というご依頼を頂いて、一瞬何のことか判りませんでした。といいますのは、和田さんは靖国問題の関連でのお付き合いでしたので、和田さんとロマン・ロランが結びつかなかったということですが、こちらのロマン・ロラン研究所の最も若い役員の方だったことを知りました。

それにしても、私自身ロマン・ロランについては、『ジャン・クリストフ』を中学三年生だったか、高校一年生かその位ですけど、とにかく最後まで歯を食いしばってでも読まなきゃいけないという、頑張って読んだという記憶だけが残っている。それ以降、殆ど無縁のままで過ごしてきましたので、一体私がどんな話をしたらいいのかわからないかなかったですけれど、ロマン・ロランにどこかで触れれば、テーマ自体は自由でよい、ということでしたのでお引き受けした次第でございます。

ですから、今日ロマン・ロランについて私が何を語るかということに関心をお持ちの方には多分ご期待に添えないことになると思いますので、予めお詫び申し上げたいと思います。ただ、今私自身が問題として考えていることの中心

で、必ずしもロマン・ロランと無縁ではないだろうと思われることについて、今日はお話させていただきたいと思えますので、どうぞよろしくお願いいたします。

演題に「犠牲の宗教への問い——ロマン・ロランの思い出に寄せて」と掲げました。ロマン・ロランの思い出に、とありますので、まさか、私がロマン・ロランに会ったことがあると思われる方はいらっしやらないと思いますが、何か深い縁があるんだろうと思われるんだろうと思うんです。大麥申し訳ない、羊頭狗肉になるんですが、先ほど申し上げましたように、ロランについては、私は『ジャン・クリストフ』を解らないながらも最後まで読み通した辛い苦しい経験がある程度なんです。

ただ、もうひとつ私はロマン・ロランという名前で思い出したことがありますて、それは、一九九二年ですからもう十七年も前になりますか、その年の十二月二十八日、暮れも押し詰まった頃に、私は当時パリに在外研究で滞在していたんですが、冬休みになって時間もできたということで、同じように在外研究で行っていた精神科医の友人と一緒に、ブルゴーニュ地方の大旅行をやりました。そのときに、私は真っ先にヴェズレーに行きたいと、ヴェズレーを訪ねました。ご存知のように、ヴェズレーはロマン・ロランが晩年に過ごした町だったわけなんです。私はヴェズレーという町は、確か世界遺産でもあったと思いますが、ワインで有名なブルゴーニュ地方の中であって、非常に豊かでなだらかな平地、うねるような平地がブルゴーニュ地方の特徴ですけど、ちょっと小高い、丘というか、もうちょっと山に近いかな、そういう高いところに造られた町なんです。登っていきますと、頂上にサント・マドレーヌ寺院というロマネスク様式の有名な寺院がありまして、その入り口の上のところに「栄光のキリスト」という有名な彫刻があります。手足をちょっと広げた感じで圧倒的な迫力がある、有名な彫刻がありますけれど、そういうところでは知られていて、行きたかったものですから、とにかくそこに行って、その町をカテドラル目指して登っていったんですけど、そうしたら右側の方にですね、ロマン・ロランの家というのが現れてきました。

ああ、そうだったんだ、と思ひまして、後で調べて判ったんですが、晩年ロランはヴェズレーに住んだんだな、ということに気がついたわけです。で、そのときに何枚も写真を撮ってきて持っているものですから、その思い出が私の中にはもうひとつロランということに残っているわけです。ただ、これだけですと観光旅行で行ったのとそれほど違わないわけで、皆さんの中にも去年、国際シンポジウムですか、フランスに行かれてヴェズレーを訪れた方もいらっしゃると思います。当然ロランの家を目指して行かれたでしょうから、全然大したことではないということになるのですが、ひとつは、どうしてロランが晩年そのヴェズレーに住んだのか、私は知りません。ご存知の方があればお教えいただきたいのですが、あとで、今日の本論でお話することとヴェズレーとまんざら無関係ではないだろうと思われる点がひとつあります。

それともうひとつは、これもプライベートな話になりますが、私自身は先ほどご紹介いただきましたように、哲学を専攻してきております。私が哲学を専攻しようと、西洋哲学を専攻しようと思った出発点には、まずヨーロッパというものに対する、ヨーロッパの文化に対する、まあ、要するに憧れですね、これがあつたんですね。それが実は遡っていきますと、ヴェズレーから出ているのです。といいますのは、これは小学校の六年生くらいだったか、中学に入ってたくらいだったか、正確には覚えていないのですが、家にフランスの写真集がありまして、それをばらばらめくって見てですね、忘れられない写真に出会ったのです。それが、ヴェズレーの町に夕陽が射していてそこを航空写真で写した、そういう写真だったのですね。なぜかこの写真に私は魅入られまして、『魅せられたる魂』ではありませんけど惹きつけられまして、それが私のヨーロッパに対する憧れの最初に実はあつたんですね。

ですので、高校時代には、哲学、ヨーロッパの哲学思想をやるうか、あるいは文学にしようか、『ジャン・クリストフ』なんかも読んでいましたから、あるいはヴェズレーの写真のイメージが強烈にありましたので、中世の歴史、ヨーロッパの中世史なんかをやってみようか、なんて思ひまして、堀米庸三さんとか、木村尚三郎さんとか、堀越孝

一さんとか、そういう中世史家の本などにも手を出したりしていたんです。ですので、極端に言ってしまうえば、そのヴェズレーの写真に出会わなければ、私は今、西洋哲学の研究者になっていなかったかもしれないわけです。そのヴェズレーが、ロマン・ロランの終焉の地だったということは、私自身にとっては感慨なきことはありません。ロマン・ロランの思い出に寄せて、というのは以上のことに過ぎません。そういうことで、誠に申し訳ないのですが、今日の本論に入りたいと思います。

「犠牲の宗教への問い」というテーマを掲げました。お配りしてある資料に早速入りたいと思います。先ずですね、順不同になりますが、一番最後の六番、通し番号をふってありますが、六番の資料をご覧ください。これ、先ほどもご紹介いただきました靖国問題の領域で私が出会った資料のひとつなんですが、「靖国の英霊」というタイトルの文章なんです。一番上をごらん頂くと、これは、昭和十九年ですから一九四四年、敗戦の前の年の四月十一日に、日本基督教新報という新聞ですね、日本基督教団から出ていた新聞に掲載されたものであることが判ります。

当時キリスト教、これはカトリック、プロテスタントを問わず、戦争協力ということで殆ど全面的に、当時の国家体制に繰り込まれていたわけです。キリスト教だけではありません。主要な大きな仏教教団も軒並み総力戦体制の中で、国民を精神的に動員するという役割を果たさせられていたと、そういう状況でありました。この文章は日本のキリスト教ですね、当時の国家体制、そして戦争のための非常に重要な装置であった靖国神社、また、重要な思想であった靖国思想というもののどのような形で組み込まれていたかということを、衝撃的に示している資料と思っています。いるんですね。

詳しく読む時間はありませんけれど、要するにここで何を記者は言っているのかというと、日本には靖国があると、靖国というのは兵士たちの流した血の意義、兵士たちの犠牲の血の意義を最高度に評価する、その血によって国が守

られているという思想であると。日本の兵士は、自ら国に殉じるときに流す血の意義を最高度に理解している兵士であり、日本の国民はそれによってのみ国が守られるんだ、ということを経最高度に理解している国民である。ところが、他方、キリスト教は宗教の中で血の意義を最も深く自覚した宗教であると。なぜならば、キリスト教の核心は、イエス・キリストが十字架上で処刑されたときに、その死が人類の罪を贖う犠牲の死であったということを信じるというところに最大のポイントがある。それこそが、人を救うんだ、その信仰こそが人を救うのだ、というときにですね、その信仰の向かうところは、つまるところキリストの犠牲の血の意義をどれだけ深く理解できるかということに係っているんだ、とこういうわけですね。

そうするとどうなるかというと、日本のキリスト者は、これはすごい存在なのだとということになるわけですね。

日本のキリスト者は、もともと靖国思想にみられるように、血の意義の深さを最もよく理解している国民である、と同時にキリスト者ですからキリストの血の意義を深く理解した宗教、キリスト教に帰依している。ここで靖国とキリスト教が犠牲の血、この意義を深く理解しているというところで繋がってしまうわけですね。

もう少し具体的に見ますと、この記事が、実は二五、〇〇〇人に及ぶ戦死者を靖国神社に合祀する、いわゆる臨時大祭に際して書かれた記事だという事が判ります。太平洋戦争の、もう最終盤に近いころですから二五、〇〇〇人の戦死者をまとめて神に祭ろうと儀式をやったわけですね。帝都東京は、非常に厳粛な雰囲気につつまれているんだけれども、その中で国民は兵士たちの流した犠牲の血によって自分たちの生活が守られていることを自覚している、というわけですね。一段目の左の方に、この血の尊さは、英霊を神と祀る日本の伝統のみがよく知るところである、とありまして、戦争で死んだ兵士の血、その犠牲を尊いものだとするその精神は、他の国にもあるだろうと。

戦争で死んだ自国の兵士を英雄として称えて、その功績を高く評価するという、そういう考え方というのは昔から今日まで殆どの国で存在してきたわけです。しかし、この記者によれば、それは記念碑を造ったりですね、あるいは

その記念碑の前で帽子を取って祈りを捧げたりですね、そういうことであって、日本のようにこの流した血そのものに最高の意義を見て、それを神として祀るという精神は、他に無いんだと、こういうわけですね。日本の兵士は、国家のため、そして当時これは天皇のため、ということになるんですが、血を流すことによって尊い犠牲を自ら払う、そのことによって存在しているんだと。

二段目の最後のところから下の三段目にかけてのところですが、先ほども言いましたように、キリスト教は、血の意義を最も自覚した宗教で、殆ど唯一の宗教であると。キリストの血こそ救済の根源なのであると。そして、ヘブル書ですから、新約聖書の「ヘブライ人への手紙」が引用されているわけです。キリストの血の意味を明記しているところですよ。ですから、キリストの血に清められた日本キリスト者が、護国の英霊の血に深く心を打たれるのは、血の精神的意義に共通のものがあるからで、この感激、また殉国の覚悟、これを、いよいよ決戦の今となってますます高揚させなければいけない、ということでもってこの文章が閉じられているわけです。

最後の段落、靖国の英霊を安んじる道は、敵撃滅の一途あるのみである、我われのたぎり立つ血のはけ道は、英霊の血と深く相通じている。こういう文章ですね。

私は、これを読んだときに、これがキリスト教、当時の日本のキリスト者が書いた文章なのか、ということでは衝撃を受けましたし、なんと無残なことだろうと思いました。それはやはり、あくまでも国家、そして軍隊、それと不可分な形でのみ成り立っていた靖国という特異なカッコつき「宗教」、これとキリスト教とを全く同等視するといえますか、そのつまるところは同じなんだという、そして、それを犠牲の血ということで結びつけている。こういう論理がキリスト教の側からどうやって出てくるんだろう、というふうに思ったわけですね。

さて、しかし、翻って考えてみますと、ではキリスト教はどうだったのだろうか。キリスト教の歴史を考えると、あ

るいは靖国的な宗教と本質的にどこが違うのだろう。キリスト教は、平和を説く愛の宗教みたいなイメージを持っている方だと思いますけれど、果たしてそうなのだろうか。そこでは、犠牲の血というのは、どういう意味を持っているのか。ここで語られているような意味は本当に無いのだろうか。

こういうふうと考えて見ますと、実はいろいろな問題が出てくるような気がするわけです。さっきヴェズレーの話をして、あとでまんざら無縁ではないかも知れないというお話をしたんですけれど、どうしてロランは晩年にヴェズレーに住んだのでしょうか。判らないんですけれど、ひとつ確実なのは、ロマン・ロランが、『聖王ルイ』という戯曲を書いていますね。ここにみまず書房の昭和三十四年初版のロマン・ロラン全集十一巻、『信仰の悲劇』というのを持ってきましたけれど、ここに、『聖王ルイ』、『アエルト』、『敗れし人々』、『時は来たらん』等が入っています。聖王ルイというのは、十三世紀のルイ九世ですね。この人は聖王といって、これは単なる呼び名ではなくて、実際に彼は教会によって列聖されているんですね。聖人にされている。カトリックでは、列聖という、聖人に正式に功績を認めて聖人に列するというのがあります。聖人の下には、福者というのがあって、幸福の福と書きまして、列福式というのがあって正式に福者になる人が出てくるんです。殆どが殉教者です。去年実は日本で列福式というのがありまして、これはかつて、キリシタンの弾圧の時代に殉教したような人たち、これまで知られていなかったような人たちを含めて、カトリック教会が正式に多数のそういう殉教者たちを福者に列したということがあったわけです。

で、聖王ルイは、死後教会によって正式に聖者になれた、信仰に極めて厚い王だったわけですね。そして当時、ヨーロッパの周辺国に対しても、また国内においても平和と正義を基調とする政治を行った、などというふうにも書かれています。

しかし、このロマン・ロランの『聖王ルイ』を読みますと、こういう場面かというと、十字軍が出て行くという場面なのです。で、ヴェズレーと十字軍の関係とは、実は浅からぬものがあるわけですね。ルイ九世が参加した十字軍

は、第七回、第八回だったと思いますが、もっと前にはクレルヴォーのサン・ベルナルという有名な神学者が
いまして、このサン・ベルナルがですね、ヴェズレーの丘からフランス、ヨーロッパに向けて十字軍に参加するべ
く演説を行ったという事実があります。ヴェズレーはいわば、十字軍の記憶と結びついた場所なのですね。ルイ九世
も十字軍との絡みでヴェズレーを訪れていたわけです。

そこで、ロランはもしかすると、その聖王ルイの記憶も意識していたのではないか、というふうに私は想像するの
ですけれど、確実なことは、彼の『聖王ルイ』という戯曲が、その十字軍に出發する時のルイ九世の周辺を描いてい
るということです。

少し作品を見てみますと、勿論詳しい方が沢山いらっしゃると思うのですが、『聖王ルイ』、片山敏彦訳の五幕
の劇史で、最初に合唱というのがあるんですが、そこに、例えばこんなふうなことが書かれています。

「どうしても出發しなければならぬ、どうしても。イエス様が我われの間をお通りになったのだ。あの方
が我われに助力をお求めになっておられる。あの方にお力添えをしなければならぬ。友らよ、あの方を護ろうで
はないか。せめて収獲がすんでいたらなあ。わしらが行ってしまったら誰が村の世話をするだろう。私たちの主が
泣いておられるのを私は見た。主を信じない異教徒の者らがあの方を苦しめている。彼らがまたしても主の額の
上に茨の冠を置いたので、主の額に血が流れている。私たちの主なるイエスが、我われから遠いところでひどく苦
しんでいらっしゃる。あの方をお救けしに出かけよう。」

こんな調子ですね。つまり、農民なども一緒に行ったといわれていますけれど、王様から庶民までみなそれぞれ仕
事で忙しいんだけど、今エルサレムですね、イエスの思い出のあるバレスチナの地でイエスは未だに十字架に架かっ

て血を流している。それは異教徒たちがその地方を占拠しているからで、その異教徒たちの手からイエスをお救ししなければいけないと、こういう論理ですね。

そして、劇の中に入りますと、ゴーチエ・ド・ソールズベリーという、これはドイツの人らしいんですけど、自分の弟を殺したというので、自分の罪をどうやって贖っていいか判らないといっているのですけれど、この人に対して、イノセント四世という、これは当時の法王ですね。ローマ教皇が、お前の身を十字軍に捧げよ、お前の犯した様な過ちを邪教徒どもの血の川で洗い清めよ、そして我らの主イエスをお救い申すための任務を尽くせ。これらの誓いを守るという条件において全能なる神の御名により、お前の犯した罪を地獄から解放する、とこういうふうに言っているわけです。それから、これは、貧しい人々というのが出てきますが、「よき王様、どうぞ私どもを追い払わないでください。私どもは貧乏でございますが、私どもも他の人々と同じように魂を持っております。主なるイエス様のために死ぬ幸いを他の人々と同じように私どもにお許しになってください。お心優しい王様、私どもをお見捨てにならないでください。」と言って、ルイ九世に自分たちも連れて行ってくれと、イエスのために死ぬ幸福を自分たちも味わいたい、こういうふうに言っているわけです。

一番最後のところの、ルイ九世、聖王ルイの言葉ですが、「今後、我われの新しい祖国がわれわれと共にある。聖なる受難はまだ終わっていない。救世主のお苦しみは今もまだ十字架の上で続いている。主のお苦しみを我われは共に担いに行こう。我々のイエスの流しておられる涙をぬぐいに行こう。友ら、何ものをとも恐れるな。我々を何事が待ち受けていようとも。さまざまな危険と悩みと死を潜り抜けて大きな海を渡り超えて、私はおんみらを神に導く。」こういうふうになっているわけです。

この最後のルイの言葉は簡単に解釈できない部分もありますが、全体としてはやはり当時のキリスト教十字軍が中東に向かって行く時の論理がよく出ていると思います。

ルイは十三世紀の人ですが、十一、十二、十三世紀の当時の十字軍の論理の中心はやはりイエスを異教徒から取り戻す、異教徒たちによって苦しめられているイエスを解放する、お救いするということでありました。そして、この十字軍に従事することで自分の罪が許される、こういうことでした。ロマン・ロランが当時の十字軍の思想についてどのように本当は考えていたかということは、私は専門家ではないのでわかりません。ただ、『聖王ルイ』の内容を見ても犠牲の宗教としてのキリスト教の問題が、ロマン・ロランにとって無縁だったと言えないような気がします。解説などを読みますとロランは、幼いころの素朴な信仰から一旦離れ、その後晩年またキリスト教に近づいたと書いてある。この点については皆さんのなかで研究の対象になさっておられる方がいらっしゃるかもしれませんので、何かあったらあとでお教えください。

この『聖王ルイ』が示している問題というのは今日の私の話の内容にあきらかにつながっていると思います。

靖国的な宗教とキリスト教と、私自身は根本的な質的な違いがあると考えています。にもかかわらず、先ほどの日本基督教新報の記事にあったような、あのような癒着もまた歴史にありえなし、今後もありえないとは言えません。そこに私は犠牲という観念、犠牲の論理といいますが、そういうものを見るのです、犠牲の倫理というべきか、犠牲の信仰といったものを見るわけです。

それは、犠牲、サクリファイスという言葉のそもそもの意味にもつながることではありますが、本来、血塗られた事実である人間の死、しかも戦争の場面であるような悲劇的な、そういう非業の死を聖なるもの、神聖なものにする、サクリファイスはもともと聖化するというラテン語です。

「犠牲」ももともと中国で動物を殺害して宗教的な祭祀で動物を神に捧げることの意味していました。羊だったり牛だったりしたのですけど、そこでは本来おぞましいものである殺害というものが、そのおぞましさが実は表面からすっかり消えて行って、あるプロセスをとおしてむしろ聖なるものになっていくことです。

靖国がどういう宗教であるのか、宗教と言えるのか、これはずっと議論のあるところですが、少なくともたしかなことは、靖国の英霊という人たちはみな基本的に戦場で非業の死を遂げているわけです。殺すか殺されるかというところで、血塗られた凄惨な死を、死んでいる人が多いのです。しかし、そういう戦死者が御霊という形で靖国に集められて、ある儀式を通して神となっていく、そうするとそこは、聖なる空間、靖国神社というサンクチュアリ、聖域の中に、聖なるものとして祀られ続けられるわけです。そのプロセスはまさに死者の聖別としての犠牲のプロセス、サクリファイスのプロセスと言えると思います。これがキリスト教的な信仰とどう違うのか考える時に、私がまず手がかりになると思いますのは、西洋哲学の分野では、キルケゴールの議論、ゼーレン・キルケゴールは十九世紀のデンマークの人ですが、この人が『おそれとおのき』という著書の中で旧約聖書創世記第二十二章に出てきます、いわゆるアブラハムによるイサクの奉献の物語について議論しています。

ロマン・ロランがキルケゴールについてどこかでふれているかどうかわかりませんが、哲学史上は重要な人です。この人が『おそれとおのき』、これはパウロの書簡に出てくる言葉そのものを書名にしているのですが、その中で、創世記の第二十二章、創世記というのは神の天地創造から始まる旧約聖書の最初の一巻です。その第二十二章にアブラハムによるイサクの奉献の物語が書いてあります。

アブラハムという人はキリスト教以上にユダヤ教、イスラム教においてそれぞれ信仰の父として最高の尊敬をあつめている人です。

カルデア地方、今のイラクで生まれ育った人ですが、あの地域の偶像崇拜を退けて神は一つであるという信仰を抱いて、そして神の約束の声を聞くわけです。一つなる神を信じて正しく生きればあなたを祝福して、そして、その子孫を星の数ほど増やして諸国民の父たる者にしよう、そういう神の約束を聞いて生まれた土地を離れて約束の地に旅する人ですけど、この人が子孫を星の数ほど増やすと約束してもらったのにいつまでたっても子供ができない。

妻サラとの間に、九十歳を超えてもできない。あの約束はやっぱりうそだったかもしれないと信仰が動揺するが、子供がめでたく生まれてこれがイサクです。なので神の約束の子、一人息子のイサクを大いにかわいがって期待をかけて育てるのですが、あるとき衝撃的な事実がおこります。神がアブラハムに対して、イサクをホロコーストに捧げなさいという命を下したのです。

ホロコーストとはなにか、ナチスドイツによるユダヤ人の大虐殺をホロコーストと今呼びますが、もともとホロコーストというのはギリシア語のホロカウストスで、聖書の中では全焼の生贄などと訳されてきました。ホロカウストスで全体を焼くという意味の言葉で、まさに動物を焼き殺して、そして神に捧げる犠牲のことをホロコーストということです。旧約聖書ではヘブライ語ですからホロコーストでなくてオラーという言葉で出てきます。新約ではギリシア語でホロカウストスになっています。つまり、ユダヤ人は自分たちの罪を許してもらうために定期的に子羊などを捧げていた。それによって許しを請うていたわけです。律法を守れない、守れなかった許しを得るために自分たち遊牧民にとって貴重な羊などを殺して神に捧げていました。これが、ホロコーストでした。

アブラハムは神から、あろうことか自分の愛する一人息子イサクをホロコーストに捧げなさいと言われてしまった。それで、これをどう受け止めればいいのか、彼はどう悩んだかは何も書いてないのですが、そもそも神が授けてくれた子供でこの子供がいないと神の約束も実現できない。つまり、星の数ほど子孫が増えて自分が諸国民の父になることは、不可能になってしまう。いったい矛盾したことを神は自分に命じたのだろうか。そもそも息子を殺すなどという非倫理的なことを神がなぜ私に要求したのだろうか。

これは、考えてみればまったく理解できないことなのですけれども、アブラハムは結局決断してイサクに刀を振り下ろす。ところがその瞬間に、天使が神の声を伝えて、あなたの信仰が私に忠実であることがよくわかったので、何もする必要はないということで、実際には犠牲にはおこらないのです。代わりに、近くにいた山羊がホロコーストに

捧げられるということになって、この話は終わります。

キルケゴールは、このアブラハムの決断と行為に、キリスト教の信仰の原型を見ました。彼は、それをもう一つの犠牲の行為と区別しています。信仰の騎士を悲劇的英雄から区別している。悲劇的英雄についてはいくつか例があがっていますが、一番有名なのは、古代ギリシャのエウリピデスの悲劇で「アウリスのイピゲネイア」でしょう。トロイア戦争のときギリシア軍の総帥であったアガメムノン王が、アウリスという港に軍艦を集結させていまにも出陣しようとしていたのですが、風がまったく吹かなくなり、船が出られなくなってしまいました。そこで困って神託を聞いたところ、神のお告げによればアガメムノン王が娘イピゲネイアを犠牲に捧げて神の怒りを解かなければならないことになりました。アガメムノン王は非常に悩みます。妻のクリュタイメストラにも大反対をされますし、娘も最初はいやだと言っていたが、この場合は娘のイピゲネイアが「わかりました。お父さんのため、ギリシアのため犠牲に捧げておかまいません」と言いました。それでアガメムノン王は、自分の娘に刀を振り下ろしました。これも実際に犠牲はおこりませんでした。刀を振り下ろした瞬間にイピゲネイアはどこかに消えてしまっ、代わりに鹿が殺されます。イピゲネイアは、ずっと遠くに飛ばされて、こちらの方でまた別の話がはじまるというわけです。

キルケゴールは、例えばこの二つの話はそっくりだろうと、どちらも父親が神の命によって愛する息子、娘を犠牲に捧げなければならなくなりました。そして、苦しみながら決断し行為におよぼうとするのですけれども、最後はそうならなかった。代わりに山羊とか、鹿が犠牲になりました。そっくりだと。しかし、決定的に違うところがあるとキルケゴールは主張しているわけです。それは、アガメムノン王の場合は娘を犠牲にしなければならず苦悩しますが、これは悲劇に違いないのですが、その悲劇に耐えて娘を犠牲にすることによって彼は、ギリシアの王として、またギリシア軍の総帥としてトロイア戦争の指揮官として偉大な功績をあげることにになり、自分の娘を犠牲にしてもギリシアのために働いたということで悲劇的英雄になってギリシアの歴史に永遠に刻まれます。語り継がれることになる。

そのことによって、アガメムノン王は心から慰められる。彼は父親として傷つくのだけれども、ギリシアという民族共同体の中で功績を最高に評価され慰められるというわけです。

ところが、アブラハムの場合にはそういうことはありません。彼は国家や民族をその時点で持っていませんでしたので、家族しかなかったのです。ですから、彼が息子イサクをホロコーストに捧げるということは、妻から見ても、あるいは誰から見ても、これはまったく理解できない行為であって、彼はたった一人で神の命の前で決断しなければいけなかった。彼の行為は例えば現代にもってくれば、十九世紀のヨーロッパでもとんでもない殺人、息子を殺す尊属殺人ということになります。狂気であるか殺人者であるかどちらかにしかならないのです。そういうことを彼はしかし、たった一人で引き受けなければならなかった。アブラハムは絶対に人間共同体の中では慰められることがない。ここに違いがあるのだと言うのです。

しかし、信仰というのはあくまでアブラハムの行為であって、アガメムノン王の行為は倫理的な行為である。アガメムノンは家族の倫理は踏み越えてしまうのだが、民族共同体、国家共同体の倫理の中で彼はおさまりがつく。私はなかなか鋭い議論だと思うのですが、靖国というものを考えてみるとこれは悲劇的英雄、キルケゴールのいう悲劇的英雄と解することができるのではないか。つまり息子を送り出す、赤紙が来た息子を戦争に送り出す、これは非常に苦しい行為であり、できることなら代わってやりたいけれどもそれもできないで、戦死して帰ってくる。これが国家的に尊い犠牲であるといわれるのです。家族としては、これはまったく納得できないけれども、しかしそれは名誉の戦死でした。お国のため、「天皇陛下」のために尊い犠牲として、あなたの息子さんは、あなたの夫、あなたの家族は戦死したのです、と言われるわけです。

だからこそ、「靖国に神として祀って英霊として感謝と敬意を捧げましょう。総理大臣も天皇陛下も皆さんお参りしてくださいます」、こういうふうになって行くのですね。つまり家族を戦死にいたらしめてしまった、そのこと自

体は悲劇以外のなものでもないのだけれども、しかしそれが国家民族のレベルで慰めを得る、その慰めを与えるのが靖国信仰という形になっていると理解することができないのではないか。

先ほどの、日本基督教新報のあの議論というのは、この倫理的なレベルでの、悲劇的英雄の犠牲と、信仰のレベルでの犠牲というものを混同している、レベルの違うものをごっちゃにしていると、とりあえず言えるのではないかと思います。

しかし、問題はそれでもキルケゴールの議論は、信仰の騎士について、犠牲を必要としているのではないか。信仰は犠牲を必要としている、と言っているのではないか。アガメムノン王の犠牲と、アブラハムの犠牲、正確に言えば、イピゲネイアの犠牲とイサクの犠牲、これは、レベルが違うといっても犠牲には違いないのではないか、そういう疑問が出てきます。アブラハムの場合は結局イサクを犠牲にしないのだから、むしろ神は人間をサクリファイス、ホロコーストにしてはいけないという意味でストップをかけたのではないか。だから、人間をホロコーストにしてはいけない、犠牲はいけないというメッセージが込められているのだという議論もあるのですが、私はこれはよく考えてみれば違うのではないかと思います。というのは、あくまでもアブラハムが決断して刀を振り下ろしたのを見て、神はそれでもってアブラハムの信仰を評価して、あなたは私に忠実であることがわかった、私の命を忠実に実行しようとしたから、だからしなくてもよいと、こういう話になった。ということは、実は犠牲はすでに実行されているのと同じであって、自分の息子を犠牲にすることができなければ、その信仰が証されたということにはならなかったわけです。あくまで、犠牲と決断が組み込まれて、初めて信仰が成り立つという形になっている、と言えるのではないか。

そういうふうと考えていきますと、当然キリスト教の場合、問題はイエス・キリストの犠牲ということになってきます。先ほどの日本基督教新報の文章にありますとおり、キリスト教というのは、ナザレのイエスと言われた人が実は神の子、子なる神であって、神がこの世につかわされたひとで、十字架上で処刑死をすることで、人間の罪を贖なっ

てくれたと。イエスの十字架上での処刑死を贖罪死、人間の罪を贖うための死と、そう理解することを核心とした宗教であると言えると思います。

実際、そういう考え方を定式化した古典的な例は、ヨーロッパ中世の哲学者アンセルムスなのですが、この人はちょうど十字軍が始まる時代に活動した人です。哲学史ではよく神の存在論的証明というのがでてくるのですけれど、この犠牲の問題で重要なのは、彼の『クール・デウス・ホモ』つまり「何故に神は人となったか」です。

この中で、アンセルムスは、当時のキリスト教がユダヤ人たちから、異教徒たちからの問いに答えられていないと。なぜお前たちの宗教はナザレのイエスという人が犯罪者として処刑されたのを、そんなにありがたがっているのだ。あれはただの犯罪者として死刑になっただけではないか。なぜ、そんな者を神だと言って崇めるのだ、ユダヤ人や異教徒たちからそう問いかけていた。それで、アンセルムスは、これに正面から答えなければならぬということ。で『クール・デウス・ホモ』を書いたわけです。

アンセルムスの議論は簡単に言ってしまうと、人間は罪を犯したゆえに死に定められている。これは、聖書ではアダムとイブの墮罪から始まっているのですが、ようするに人間は原罪を持っているわけですね。で、この罪はアダムとイブ、つまり人間、アダムとイブは人間の象徴ですから、人間が神に背いて罪を犯した、これは、神に対する一種の侮辱である。神の尊厳を傷つけたことになる。したがって、当然その神の尊厳は回復されなければならない。つまり、人間が神の尊厳を傷つけた、そのことに対して贖いをしなければならない。神の尊厳を傷つけたのは罪を犯した人間なのだから、人間がそれをしなければいけないのですね。

実社会でも、実際に罪を犯した加害者、犯罪者が罪を贖わなければならない、それと同じで人間が神に対して罪を贖わなければならない。神の命に反する、神に背くという罪を犯したのは人間だから、人間が神に対して贖いをしなければならない。ところが、単なる人間が何人集まってもそれでは神にお返しはできない。絶対の距離がありますか

ら。神に対する侮辱はいくら人間が頑張っても人間の力では埋め合わせができない。だからそれは神に力をかりなければならぬ。神でなければ神に対する侮辱は取り返すことはできない。しかし、神に対して侮辱したのは人間なのだから人間でなければ贖いできない。そこで、神にして人であるイエス・キリストが十字架にかかってお返しをした。イエス・キリストは神の子であり、子なる神である、つまり人の形をとった神である、そのイエス・キリストによってしか人類の罪は贖えなかった。こういう議論を作った。これが、直接的、間接的に大きな影響を与えたわけで、イエス・キリストが十字架上で犠牲の死を遂げて下さったことで、私たちは罪深いのに赦されているのだ、それを信じよう、と。これがキリスト教の教えの中核になってきた。しかし、私が問いたいと思いますのは、この論理のなかには、やはり、キリスト教がそこからぜひ解放されるべきであった犠牲の死、サクリファイスの論理が、キリスト教自身のなかに紛れ込んでしまっているのではないか、ということです。

イエスは、人間が救われるために犠牲の死が必要だというふうにとどこかで説いているだろうか。福音書のなかでイエスは人間の罪が許されるためには、何か神に対する巨大な贖い、贖罪の行為が必要だとどこかで説いているだろうか。もっとも、福音書は初期のキリスト教団が成立してから書かれましたし、パウロの書簡よりもっと後に書かれていますから、贖罪思想が紛れ混んでいる部分もあるのですが、今、新約聖書学が非常に発達しています。その辺は腑分けがかなりできています。

イエスの死後、弟子たちが作っていた、そしてパウロなどによって大成されていったこのキリスト教という宗教とイエスの教えは、これは決してイコールではない、ということは今日、学問的には常識といってもいい。

今日、お配りしていた資料一から五までは、この問題を哲学者として鮮やかな形で取り出したと私が考えている、ニーチェの文章です。

ニーチェについても、十九世紀後半に活動した人ですし、ヨーロッパ全体に知られていましたので、ロマン・ロラ

ンはどこかで論じているかもしれませんが私は存じ上げません。ニーチェはどんなふう^にに論じたのか。皆さんニーチェといえば「神は死んだ」と、神の死を宣告し、キリスト教を徹底的に攻撃した思想家、哲学者だというイメージをお持ちでないかと思われ^ます。確かにそのとおりです。

ニーチェによれば、キリスト教は人類の歴史において最大の不幸である。「キリスト教のおかげで人間はみんな病気が重くなった」と。キリスト教というのは、人間の病気が作り上げた、そういう宗教だから、それに感染するとみんな病気が重くなってくる。ではどんな病気かという^と、ひとこと^で言う^とルサンチマン。怨恨感情、恨み^づ辛み、復讐心、これがルサンチマンです。

ルサンチマンを抱くのは、ニーチェによれば、弱者である。身体^の弱い人、心が弱い人、財力が弱い人、知的能力がない人、身体的に障害をもっている人、病気の^人、いろんな「弱者」がいる^でしょうが、ニーチェは、弱者は現実の生活^のなかで強者に対して敗北せざるを得ない^と言う。

現実の生活は、ニーチェによれば人々が力の増大を求めて競い合っている、「力への意志」相互の闘争である…

力というのはドイツ語のマハトで、「権力」の意味でもあります。生命の本質は、競争、戦い^にあって、強い者が勝ち、弱い者が敗北する。まるで昨今の弱肉強食、ネオリベラリズムの経済思想のよう^なです。それが現実の歴史の根源的事実であると。弱者は敗れざるを得ない^のですが、生きている限り、力への意志、権力への意志^をもっていますので、現実の生活では絶対に勝てないがゆえに、現実の生活とは別のところに、別の価値基準を作り上げて、その世界で強者に復讐しようとする。それが道徳であり、神を中心とした宗教であり、とりわけキリスト教である。現実の世界では力が強いことは悪いことではない。なぜなら強者が勝つ^のですから。誰もが権力の増大を求めているのですから、それは悪いことではない、強者が自分の生き方を「これは良い」ということが善^いというものの起原である。強いものが良い^いということであって、弱者は強者に勝てない。それに対して弱者は、ルサンチマンから別の形で強者に

勝とうとして、全く別の価値基準、すなわち、弱者こそよいものだという価値基準を作りだす。現実には、権力や暴力、これが我がもの顔にふるまっているけれども、しかし権力や暴力によって弱者を虐げている人は、本当は悪いことをしているのだから、死後、地獄に落ちる、最後の審判の時に罰せられる。つまり最終的に神の支配する宗教、あるいは道徳の真の世界においては、心優しく弱いけれど、正直に謙虚に生きている者が神に悦ばれ、天国に行けるのだ、と。逆転した別の価値の世界をデッチあげる。これがキリスト教である。だから、キリスト教では権力や暴力やそれにつながるものが悪いこととされる。貧しい人、弱い人、そういう人々が天国に近いとされる。しかし、ニーチェは、道徳の世界、キリスト教の宗教の世界、これは、そのように作られた虚構であって、現実には権力への意志の競い合いの世界しか存在しないと主張します。

キリスト教は、そのような現実から逃避して虚構のなかで、生のエネルギーすなわち権力への意志を抑圧する方向にのみ作用してきたので、人間の創造性やら積極的な生を抑圧してきたのだから、だから人類の最大の不幸だったのだ。と。こういうわけです。

しかし、ニーチェによれば、そのようなキリスト教的な神への信仰は、近代の歴史を通して崩壊してきて、今最後に最後の死を宣告すべき時である。これまで信じられて来ている道徳、キリスト教的道徳観、倫理観、善と悪、正義と不正義、こういうものは、それらを頂点として成り立たせていたキリスト教への神の信仰が崩壊してしまった以上は、もう崩壊せざるを得ないので、これからは力への意志の永遠に続く闘争の時代、ニヒリズムの時代になる。それをまっすぐ真正面から受け止めて、その闘争のなかを生き抜くのがほんとうの人間の在り方なのだ。こういうふうに主張したのです。

さてそういうニーチェですが、『反キリスト者』という著作を書いています。最期の彼は狂気に陥りますが、その前年に書かれた『反キリスト者』で、キリスト教を徹底的に攻撃しています。しかし、その中で、イエスの死後、弟

子たちが作り始めてその後、巨大化したキリスト教という宗教と、イエスの教えというより生き方が、根本的に異質のものであるということを主張している場所があります。そして、実はそこに例の贖罪が絡んでいる。

まず、①の三十九節を見て下さい。傍線を引いているところを読んでみます。ニーチェは「キリスト教のほんとうの歴史を物語る。」と書いています。本当の歴史とは一体何か。「根本においてはただ一人のキリスト者がいただけであって、その人は十字架で死んだ」となれば、これはイエスのことを言っているとは思えない。「根本においてはただ一人イエスだけがキリスト者だった。その人は十字架で死んだけれど、それとともに福音が十字架で死んでしまった」というている。福音とはよき知らせ、よきメッセージのこと、そして「信仰のうちに、例えばキリストによる救済の信仰のうちにキリスト者のしるしを見るならば、それは馬鹿げきった誤りである」と。彼は救済など信じない。イエスが十字架上で犠牲死を遂げたから人間の罪が赦されたなども信じない。それは「馬鹿げきった誤り」である。「単にキリスト教的実践のみが、十字架で死んだその人が生き抜いたと同じ生のみがキリスト教的なのである。今日なお、そうした生は可能であり、ある種の人たちにとっては、そのうえ必然的ですらある」。ここでキリスト教的実践とか、生とかいわれているのは、イエスの生きた生であり、イエスの行った行為であることは明らかです。「信仰ではなくて行為」である。「なにより多くのことを行わないこと、別様の存在である」と言っていますが、現実にはないことを信仰するのをニーチェは退けるわけで、実際どのように行っていたのか、どのように生きたのか、どのように何をしたのか、あるいはしなかったのか、これだけがキリスト教的である。ただし、それはイエスの教えに即しているという意味でキリスト教的である。

では、それはどんな生き方なのか。三ページの三十三節に行きます。

ニーチェによれば、本来イエスの説いた福音、イエスによってもたらされたよき知らせ、そこには、「負い目とか罰とかの概念はない」。報いという概念も、罪という概念もない。人間は原罪を負っている。それは神に対する負い

目であるから、その負い目を清算するためには罰を受けないといけないとか、あるいは、報いを受けなければいけないとか、そんなことはイエスの福音のなかにはないんだ、と。「神と人間の間を分かちつずれの距離関係も除去されている、——まさしく、これこそ悦ばしき音信なのである。浄福は約束されるのではなく条件に結びつけられているのではなく、唯一の实在性であって、その他は、それについて語られるための記号」である。つまり、神の国が浄福の国だとするならば、それは、かくかくすればそこに行けるとか、善行をつめば赦されて浄福になれるとか、約束されるのではなく、あるいは条件付きでいわれるのではなく、現に今ある唯一のリアリティ、それが浄福であり、神の国である。つまり、神の国というのは現実そのものであって、神と人間との間に距離がない。イエスは神の子であり、子なる神であるといわれていたわけで距離がない。そうすると皆が神の子であるということにもなる。そして、そうした状態の結果は「ひとつの新しい実践、福音的な実践」のうちに投影される、ということで、信仰ではなくてキリスト者をキリスト者たらしめるのは行為である。通常の行為と違った行為なのであると。

例えば、キリスト者は「おのれに悪意を抱く者に言葉によっても心のうちでも、手向かわない」ということ。キリスト者は「異郷人と同郷人との間に、ユダヤ人と非ユダヤ人との間に何らの区別もおかない」ということ。キリスト者は「誰にも立腹せず、誰をも軽蔑しない」ということ。キリスト者は「法廷に姿を見せることもなければ、弁護を引き受けることもない」ということ。

こちらには弁護士さんもおられ申し訳ないのですが、よくないのです。

キリスト者は「どんなことがあっても、たとえ妻の不義が証明された場合でも、その妻を離縁しない」ということ。「すべてこれらは根本において、ただひとつの命題であり、ただひとつの本能からの結果であって、救世主の生涯はこうした実践以外のなものでもなかった」。

ニーチェは、イエスの生涯はこういうことの実践であり、彼の死がまたこれ以外のものでもなかったと。祈り

すら彼は必要としていなかった、彼はユダヤ人の懺悔と贖罪の教えの全部を清算してしまった、自分が神に繋がっているとか、浄福であるとか、福音的であるとか、神の子であると感じるためには生の実践のみが必要である、というわけです。

ここまでいくと過激で極端であると思われるかもしれませんが、神と人との区別はないと言い切っているのです。なぜなら罪とか罰とか報いとか負い目とか、後に成立したキリスト教的な概念、これらはもともとユダヤ教のものであって、イエスはそれを清算したのだけれど、イエスの死後、弟子たちがもう一度、イエスの教えをその枠組みのなかに入れてしまった。そのユダヤ教的枠組み、これがキリスト教を作ったのだというわけです。

四ページ目の上の段の線で囲んだ部分も同じ主旨です。イエスは、彼が生きたがごとく、教えたがごとく、死んだのだ。彼は人間を救うためではなく、いかに生きるかを示すために生きて死んだのだ。実践こそは彼が人類に残したものだ。裁判官や捕吏や告訴人などに対する態度、あるいは十字架上での彼の態度。彼は反抗せず、己の権利を弁護せず、非道から身を守ることに処置をなんらとることをせず、それどころか彼はそれをそのかす。そして彼は悪を加える者たちとともに、この者たちのために祈り、苦しみ、愛する。防御せず、立腹せず、責任を負わず、悪人にも反抗せず、悪人を愛する。敵を愛し、迫害する者のために祈れと教えたイエスは、十字架上でも彼を迫害する人たちを赦していたといわれています。

これは、彼の生き方の延長だったというわけで、十字架上で彼が処刑されて死んだということに、人間の原罪を贖うための犠牲死であったという神秘的な意味はないということです。それは彼の生き方の実践、つまり敵を愛し、迫害する者のために祈るということだった。これはさらにいうと一ページ目に戻って、下の段、傍線を引いたところですが、ニーチェのいう意味での自由ということですが、ルサンチマンのあらゆる感情を超えてた卓越性、イエスの生き方と死に方のなかにあらわれているのは、一言でいうとこれなのだ。ルサンチマンのあらゆる感情を超えてた卓越

性というのは、ルサンチマンに駆られない、ルサンチマンを動機としない、つまり恨みや妬みや、復讐心や、やられたらやり返すと、こういうことから自由になっている。ルサンチマンに対する批判が一貫していますが、実はイエスこそはルサンチマンから解放されていた人であったと。弟子たちは、イエスを救世主と信じた自分たちと、王と信じたイエスが何ら特別の力を示すことなく十字架で犯罪者として処刑されてしまったことで傷ついた心、裏切られた心、絶望した心、これをそのままにしておくわけにはいかない。実はルサンチマンから、われわれが救世主と信じたイエスの死は、それによってわれわれを赦してくれる犠牲死であったと。それを信じる者が救済されると、こういうふうに贖罪の信仰およびキリスト教の教義を作っていた。それを作っていたのは弟子たち、なかんずく、パウロであり、その後のキリスト教の権力者たちであった。こういうふうになーチエは論じていたわけです。

なーチエは自身、古典文献学者で、古代ギリシャの研究者でしたから、新約聖書をギリシャ語で読んでいたでしょうし、当時の聖書学にも当たっていたはずですが。しかし、そういう枠を超えて、いわば直観的に、彼はこういう議論をしているわけです。これは私自身、とても鋭い見方であると思っています。いわば、犠牲の宗教を超えるあり方を、なーチエがここで描いている。その後成立したキリスト教と根本的に異質なイエスの生き方、死に方、ルサンチマンからの自由、いいかえると恨みや腹響心から全的に解放されていること。従って、暴力に対して暴力で対抗すること shouldn't、人を裁くことも shouldn't、そういう生き方、死に方です。それが示唆されているのではないかとということです。

だからといって、なーチエがここに描いているイエスの像に常に忠実であったというわけではありません。なーチエはあまり体系的な思想家ではありません。いろいろいつていることに矛盾がある。キリスト教を批判して、キリスト教に対する別の生き方として彼が提出しているものに、二つの異質のものが混じっている。今ご紹介したイエスの生き方、死に方というのは、彼がディオニュソスの生き方ということで挙げているものとは、同じにはできない。最

後五ページ目の上の段に、「ディオニュソス対十字架に架けられたもの」とありますが、ニーチェに言わせれば、最も重要な思想の問題は、すべてここに帰着するのだという形で、キリスト教に対してディオニュソスのものを対抗させている。

ディオニュソスというのは、古代ギリシャの神の名前、簡単にいえば、力への意志を肯定して生きる、そういう方です。力への意志を肯定し、弱肉強食のたたかいを現実と考えるならば、当然、そこには犠牲ということが出てくる。犠牲を正当化することになる。そうすると下の文章が出てくる。

線を引いたところを読みますと、「個々人はキリスト教によってきわめて重大に考えられ、絶対視されたので、もはやそれを犠牲にすることはできなくなった。しかし種族は人間犠牲によってのみ存続する」。キリスト教は、人間の尊厳という思想をつくったので、誰も犠牲にすることができなくなってしまった。けれども種族というものは、人間を犠牲にすることによってのみ存続するのだ。「この普遍的人間愛、つまりキリスト教的人間愛は、実際上はすべての病者、欠陥者、退化者の優遇である。それは事実、人間を犠牲にする力を、高貴な義務感を引き下げ、弱めてしまった」。こういうところからは、後のナチスの思想につながるニーチェが出てきますし、優生学とか、そういう思想につながるニーチェがまた出てくる。そういう意味では、きわめて危険な思想だといえるでしょう。

最後のところに、「真の人間愛は種族のために犠牲を要求する」と。つまり、ディオニュソスのな生き方、そこで人間愛は種族のために犠牲を要求する。それは「厳しいもの」である。それは「自己克服に充ちている」。なぜなら、それは人間犠牲を必要とするからである。ところが「このキリスト教と呼ばれるエセ人道主義は誰一人犠牲にならないということ成し遂げようとする」。ここでは誰一人犠牲にならないということ成し遂げようとする。すなわち、犠牲の論理、犠牲の宗教を超えるキリスト教と呼ばれるエセ人道主義と、犠牲を要求する力への意志、ディオニュソスの生き方が対比されているわけです。

では、犠牲を要求するディオニュソスの生き方と、先ほどのイエスの生き方は同じでしょうか？ 私はニーチェが描いていたイエスの生き方、死に方は犠牲というものを拒否する生き方、死に方だと思えます。

というわけで、最後に人道主義が出てきました。ロマン・ロランが史上まれに見る意味でのヒューマニストだったとするならば、ロマン・ロランにも当然、人間愛の思想があったと思うのですが、ロランにおいてこの犠牲、サクリファイスの問題は、どのように考えられていたのでしょうか？ もしも、誰一人犠牲にならない、犠牲を出さない、犠牲の論理を乗り越えるということであるならば、今日、私がお話したニーチェの描いたイエスの生き方、死に方に近くなってくるだろうと思うのですが、その辺については皆様のお考えをお伺いできればと思います。

私が考えていますことは、犠牲の問題を突き詰めていくと、現実には誰一人犠牲にならない社会というものはない、なるほど不可能かもしれないが、しかし、それを目指す努力は必要だろうと。そのために少しでも見通しをつけようというのが、今の私の考えであります。何かご参考になることがあったかどうか、あやしいのですが、最初にお断りしましたように、ロマン・ロランの専門家ではない者として、今日はお話しさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

（東京大学教授・フランス哲学）

ロマン・ロラン（一八六六―一九四四）音楽学者

西垣正信レクチャー・ギターコンサートに寄せて

マティアス・ロジェ

（郁子・イワノヴィッチ／大出學 共訳）

私は幼少のころから音楽によって導かれた。音楽は私の最初で恐らく最後の恋であった。実際の女性の愛を知る前に、私は音楽を本当の女性の様に愛した”とロマン・ロランは晩年に、生涯を通し離れることのなかった音楽への情熱を語っている。この隠喩として語られる彼の音楽に対する愛は、ロマン・ロランの博識と知性豊かなユマニストとしての人生の中でいかに本質的に重要であるかを示している。この音楽への傾倒は、母親から得たもので、彼が物心つくか着かないうちから、母はモーツァルトのような大作曲家の作品を手ほどきし、彼は貪るように初見でピアノを弾いた。その後ジョゼフィーヌ・

マルタンに師事し一層上達した。この女性は第二帝政時代、ルイ・ナポレオンの皇后の専属ピアニストであり、ロッシーニやショパンとも面識があった人である。

しかし、ロランにとり一八八二年十一月二十六日夜、ベートーヴェンの第七交響曲を聴いたときが真の音楽への啓示であった。コンサートが終わると、すべてが一変し、ロランは何よりも音楽に身を捧げようと決意する。この時から音楽会場に足繁く通い、偉大な音楽家たちへの敬愛の念を終始持ち続けた。彼にはただひとつの欲求しかなかった、つまりこの情熱をできるかぎり多くの人々

しかし、ロランにとり一八八二年十一月二十六日夜、ベートーヴェンの第七交響曲を聴いたときが真の音楽への啓示であった。コンサートが終わると、すべてが一変し、ロランは何よりも音楽に身を捧げようと決意する。この時から音楽会場に足繁く通い、偉大な音楽家たちへの敬愛の念を終始持ち続けた。彼にはただひとつの欲求しかなかった、つまりこの情熱をできるかぎり多くの人々

と分かち合うことである。彼によれば、音楽は人間の精神を燃え立たせるべきもの“なのである。だがこの時点ではまだ彼の思うようにはならなかった。彼の両親はより確実な学問の分野で教職の道を彼に望んでいたので、高等師範学校卒業後、歴史の教授資格試験を取得し見事にそれを果たした。しかし音楽家としてのキャリアをあきらめた事は、なんとしても彼には永年深い傷となって残った。

一八八九年から一八九一年までロランは、フランス政府給費生としてローマのヴィラ・ファルネーゼに滞在した。その間に敬愛する楽匠たちの生涯に関心を持ち始め、直感的にこれらの偉大な音楽家たちの芸術とその生涯との関係を洞察したが、すべて内面的に準備されたこの成果の中に、未来の音楽学者としてのロマン・ロランが成熟していたのだった。意義深いことは、この時期に後年の小説『ジャン・クリストフ』と『ペートル・ヴェンの生涯』の大きな構想が同時に浮かんできたことである。友人シュテファン・ツヴァイクは、ロランのこの時期が決定的に

重要であると認めている。“彼はイタリアに赴くときは、目的も猥とし、確信が無いまま、生来の音楽家、美意識豊かな詩人、また必要から成った歴史家でもあったが、その地で、次第に彼の裡に、まるで互いに惹かれ合うかのように音楽と詩がまさしく一体となったのだった”。

彼の正式な音楽学のキャリアが実際に始まったのは翌年であった。ローマに戻り音楽史の学位論文に着手し、サンタ・チェチーリア図書館で豊富な、しかしその頃はまだ良く知られていなかった音楽文献を調べはじめた。特に当時はほとんど無名のモンテヴェルディに対し熱中し、ルイージ・ロッシの「オルフェオ」の発見、さらに不当にも忘れられていたフランチェスコ・プロヴェンツァーレの作品に対する興味などを通して、イタリア・バロック音楽の再発見の一端を担った。

一八九五年にソルボンヌ大学で初めて、音楽学の三つの論文の公開口述審査が行われた。それは一八九五年六月十九日に、ジュール・コンバリウ、モリス・エマニエルとロマン・ロランによるものであった。ロランの主

題は「近代叙情劇の起源、リュリおよびスカルラッティ以前のオペラの歴史」で、ヨーロッパに於けるオペラの誕生と流布についての研究である。その頃まだ音楽史の論文は一般的ではなかったがロランは直ちに大成功を取めた。一方、ジュール・コンバリウは一九〇四年から一九一〇年までコレージュ・ド・フランスで音楽学の講座を担当、モリス・エマニュエルは一九〇九年から一九三六年までコンセルバトワールの音楽史を担当した。平行的にロマン・ロランは、一八九六年からヴァンサン・ダンデイのスコラ・カントルムに於いて、またエコール・デ・オート・ゼチュードに於いて音楽史講座を創設した。

こうして、ロランの教職のキャリアが始まった。彼の口述審査の後、高等師範学校で芸術史の教授に任命された。そして彼の好む音楽に傾いて行く。例えば一八九八年の題目はベートーヴェンで、各交響曲の分析であった。一九〇二年ロランは、発足したのエコール・デ・オート・ゼチュード・ソシアルの音楽部門で教鞭を取り始めたが、そこで定期的にコンサートを企画し一般公開した。

彼は一連の音楽講義を、“歴史に於ける音楽の立場”という控えめな題の講演で始めた。その後の講義は変化に富んでいる。例えば、十六世紀のフランス音楽家グレトリ、あるいはフォーゴ・ヴォルフなど。一九〇四年に、ロマン・ロランは正式にソルボンヌ大学の芸術史教授に任命されたが、彼はそれを音楽史の講座に変更した。この権威ある大学の古来からの講座に、初めて音楽史の講座が開設されたのである。彼は一九一二年までソルボンヌで公開講義をし、高く評価されたが、それは常に幅広い内容の意向が示されたものだった。彼の講義は、グルックのオペラとその先駆者たち、ハイドンとモーツァルトの様式、近代音楽形式の創造、さらにはヘンデルについてなどであり、好評を博した。

ロランの退任後、そのあとを継いだアンドレ・ピロが一九一二年から一九三七年まで任務に就く。音楽学の分野は少しずつ広がってゆき、一九五二年にポール・マリ・マソンがパリ大学に音楽学研究所を創立した。その後ジャック・シャイイが一九五二年から一九七二年まで二十年間

所長を勤めた。

ロランは教職活動の傍ら、まだ揺籃期にあった大学のフランス音楽学確立のため多くの著述を表した。さらに、一九〇三年より「演劇と音楽芸術」誌に定期的に時評を執筆した。一九〇〇年の万国博覧会の折には、カミーユ・サン＝サーンスが議長を務めてオペラ座図書館で開催された音楽史会議の事務局長に任命された。その会議でロランは、「ルイージ・ロッシのオルフェオとマザランの時世に於ける、パリのイタリア人音楽家たちに関するノート」を発表、その後に「音楽史と音楽批評」誌が刊行された。その後「音楽誌」と名を改めてジュール・コンバリュウが編纂したこの雑誌に、一九〇一年から一九〇四年までロランは多くの論文を寄稿した。ロランはある特定の時代の研究に限定することなく、それは百科全書的文化であることが彼の著述からも明らかである。例えばワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」、「ジークフリート」、イタリア音楽、モーツァルト、グルック、ベルリオーズなどについて、さらにフーゴー・ヴォルフ、クロード・

ドビュッシー、また親交のあったリヒャルト・シュトラウスなどの音楽家の肖像についての記述である。彼の著作の中で留意すべきものとして、『過去の音楽家と今日の音楽家』、と一九一〇年に出版された『ヘンデル』、あるいは一九〇三年に完了した『ベートーヴェンの生涯』の二巻がある。要するに、ロランは同時代の音楽に対するのと同様、過去の音楽に対しても興味と関心を持っていたのである。かくして、彼はボン音楽祭でベートーヴェンを賛嘆し、ストラスブル音楽祭ではグスタフ・マラーに傾聴した。

しかし、ロランにとって音楽学の教職と文学活動は両立できることではなかった。そのため一九〇九年コンセルバトワールでの音楽史の授業の依頼を断り、二年間の休職後一九一二年にはソルボンヌも辞職した。この論文の口述審査後、早くも彼について回る噂に苛立っていた。『皆是我的ことを音楽学者だと思っているようだが、私がやりたいのは戯曲を書くことなんだ』。彼は何よりも自分は小説家であり劇作家であると感じていた。彼は、大学や学問の分野では音楽学の論文や講義でその地位を

確立させていたが、それが小説を執筆する妨げともなっていた。同時に教育者であることは彼にとって天職では無かったし、教職を熱望するものでもなかった。たとえ彼の講義が好評であり、シュテファン・ツヴァイクの言によれば、彼の教育法が生き生きとして影響力のあるものであったにせよ、ロラン自身は、教師の心を持ち合わせていないし教える事が好きではないと感じていたので、彼自身その成功に驚いていた。『今年は大変な人気で、ご婦人方は床や講堂の階段に座り 他の人々は一時間も身じろぎもせず立ちっぱなしでした。私自身はと言えば、自分の事をずい分退屈だと思い、話しながら自分の話し声に耳を傾けて、こう思うのです：なんてことだ！ 何てうんざりするやつだ、まだお仕舞にならないのか。こうして居る間にピアノに向かって思うままに弾く事が出来るというのに”。

ロランの正式な音楽学の教授期間は割合短かったが、一生を通し大音楽家の生涯や音楽に興味を絶やすことはなかった。大学と音楽学から少しずつ遠のいていったが、敬愛する作曲家の作品探求は止まなかった。それは『ベ-

ートヴェンの生涯』という大作が証明している。『ベートヴェン 偉大な創造の時期』を執筆したのは一九二八年から一九四三年である。ロランにとってベートヴェンは音楽の真髄そのものであり、限らない感歎の念を持ち続けた。『少年期に経験した虚無に対する危機に陥った時、ベートヴェンの旋律を思うことで、自分の裡に永遠の命の光を見出すことが出来たのだ”。そして彼の小説で描出したもう一人の偉大な人物、ジャン・クリストフの輪郭にこのドイツの音楽家ベートヴェンを再度見出すのである。ひとつのシンフォニーのように着想されたこの『音楽小説』により、ロマン・ロランは、ここで遂に音楽と文学に対する情熱を合体させることが出来たといえるであろう。

(フランス大学^{アグレジュ}教授資格者・音楽学)

フリー・ツォン（傅聰）ピアノ・リサイタル

— 三つの文明の出会い —

中国 日本 ヨーロッパ

魯迅の『阿Q正伝』をヨーロッパに初めて紹介したロマン・ロラン、そしてロランの『ジャン・クリストフ』全訳を日中戦争下の中国青年に紹介したフリー・レイ（傅雷）。

そのご令息であり、偉大なピアニストとして知られるフリー・ツォン氏。激動と苦難に満ちた長い歴史を経て、この世界を結ぶ精神の輪が、いま完成されようとしています。

「日本・ロマン・ロランの友の会」が設立されて六〇年、この年にフリー・ツォン氏お迎え出来ました事は無上の喜びであります。この記念事業のために、ご来日くださいましたフリー・ツォン氏に心から感謝申し上げます。

演奏者・傅聰^{フリー・ツォン}氏のプロフィール

一九三四年上海生まれ。著名なフランス文学者・翻訳家傅雷（一九〇八—一九六六）の息子。七歳からピアノを始める。一九五三年上海交響楽団との共演で「ベートーヴェンピアノ協奏曲第五番」〈皇帝〉でデビュー。一九五四年

ポーランドへ留学、この間の父子の往復書簡が日本では『君よ弦外の音を聴け』のタイトルで翻訳され、二〇〇四年に出版される。第五回シヨパン国際ピアノコンクールで東洋人として初めて三位、マズルカ賞を受賞したのは一九五五年。一九五九年からロンドンを拠点に世界的に演奏活動、エリザベート王妃国際ピアノコンクール、シヨパン国際ピアノコンクールなどの審査員。タイム誌で「今日のもっとも偉大な中国人音楽家」と評されている。日本では一九八〇年度『レコード芸術』誌のレコードアカデミー賞、受賞、近年、別府アルゲリッチ音楽祭にも参加、今日に至る。

一九六〇年代の中国の文化大革命時の混乱で父傅雷は迫害を受け、母とともに悲劇的な自死に追いやられる。そのため二十年以上、祖国に足を踏み入れられなかった。その後、政治的回復に至り七九年以降、毎年帰国し、北京、上海などの各地で演奏会を開催し、大成功を収めながら後進の指導にもあたっている。

私の世代の多くの芸術家がロマン・ロランから
極めて強く感化されました。
そのロマン・ロラン研究所からご招待をいただき
とても光栄に存じます。

フー・ツォン

フー・ツォン
傅聰さんに書く

西 成 勝 好

N (西成) …今日はロマン・ロラン友の会創立六十周年記念事業の一環としてフー・ツォンさんのコンサートにご参加いただきまして誠にありがとうございます。私、主催団体ロマン・ロラン研究所理事長の西成でございます。ただいま、フー・ツォンさんに素晴らしい演奏をいただきましたが、これからフー・ツォンさんに少しお話を伺いたいと思います。ご案内の通り、フー・ツォンさんのご尊父様フー・レイさんは『ジャン・クリストフ』をはじめロマン・ロランの多くの作品を中国語に翻訳して、紹介された方であります。その後、いわゆる文化大革命で命を落とされました。フー・ツォンさんは気取らない気さくな方で、このインタビューなども、どのような内容にするか予め打ち合わせをしようと思いましたが、そんなことは嫌だといわれまして、これは全くブツツケ本番であります。

フー・ツォンさん、お父様からロマン・ロランのことなどお耳にしたお話をお聞かせ願えませんか？

F (フー・ツォン) …父は子供の頃の私にはあまりロマン・ロランのことなど話していませんでした。それでも、私は早熟だったので、父がロマン・ロランの翻訳をしていたことは知っておりまして、父に隠れてベッドの下で『ジャン・クリストフ』を読んだりしていました。自分では作品中の主人公になったつもりで、夢中になって読みました。ロマン・ロランは音楽の歴史について、特にイタリア音楽とか、単に音楽の技術の面ばかりではなく、歴史、文学の広いバックグラウンドから分析・批評していましたから、私には大変な糧となりました。

N …ピアノ・コンクールで素晴らしい成績を挙げられてポーランドで生活されておられたときに、お父様から手紙で中国国内での音楽および芸術全般についての様子ですとか、世界での芸術界の状況、そして芸術に関するお考えをお聞きして、どのようにお感じになりましたか？

F…当時は当局の検閲がとても厳しかったので、思ったことを直裁的に書くわけには行きませんでした。それで言葉を選んで当時の中国の文化状況について憂いていたことを書いてきたのですが、私は父の想いをそこから読み取ることができました。

N…言葉に尽くせないような苦難の道を歩いて来られたわけですが、お父様がお亡くなりになられてから、名誉回復されるまで随分長い時間がかかりました。

F…父の書簡が弟によって整理されて中国国内でも出版され、世界各国でも読まれるようになりましたことはありがたいことです。私も母国に帰り、音楽院で若い人にピアノの指導をしたり、コンサートを開いたりすることはとても嬉しいことです。

N…それでは、時間も限られておりますので、お話しはこのくらいにして、またピアノをお聞かせいただくことにしたいと思います。どうもありがとうございました。

『フリー・ツォン（傳聡）ピアノ・リサイタル』を聴いて

中 西 明 朗

思い起こせば、フリー・ツォンが文革の嵐が去った後、初めて来日した一九八〇年頃だったろうか、音楽雑誌などでフリー・ツォンの名前と、中国のピアニストで、ショパン・コンクールに東洋人で初めての入賞者であるとか、その頃すでに入賞から二十数年経っていたわけで、れっきとしたベテラン・ピアニストであることなどが紹介されていたように思います。けれども実際にその演奏を聴く機会もなく、それ以上詳しいことは最近まで知らないまま過ぎてき

ました。

二〇〇四年『君よ弦外の音を聴け』（榎本泰子訳、樹花舎）が刊行されて初めて私は、ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』を二度も中国語に完訳して世に出したフー・レイ（傅雷）という人の息子がフー・ツォンであることを知ったのでした。

その本は父から息子へ送られた六十通の手紙と、母親チュウ・メイフー（朱梅馥）からの手紙十四通を選んで訳出されたのですが、それらの手紙が書かれたのは一九五四年から六六年、つまりフー・ツォン十九歳から三十二歳の約十三年間に亘っている。それらの手紙の内容は身近なマナーに関するものから、例えば父が過去にひどいことを言っていた息子の心を傷つけたことを率直に謝って許しを乞うなど、思わずほろりとさせられる箇所も少なくありませんが、それよりも人生および処世に関する助言、恋愛・結婚生活へのアドバイス、師弟関係についての論理的な分析と問いかけ、多くの作曲家や作品についての記述、更には民族、宗教、文化、芸術観、音楽評論等々、実に多岐に亘って事細かく書かれていて、しかもそれらの文中の随所に『ジャン・クリストフ』の引用があり、この父子の心の奥深くにロマン・ロランの、そしてクリストフの精神が根ざしていることがはっきりと見てとれます。親子の手紙といえどモーツァルトやロマン・ロラン自身のように、息子から「母への手紙」の例は比較的多いけれども、父から息子への手紙でこれほど多彩な内容と、あたかも恋文かと思まごうばかりの愛情あふれる表現はこれまでに見たことがありませんでした。およそ今の日本の父親が二十歳から三十代の息子にこのような手紙を続々と書き送るだろうかと考えたとき、私はそんな例を知らない、と言うより殆ど考えられないという気がします。

そのフー・ツォンもすでに七十五歳、アルゲリッチと共に〈別府音楽祭〉の顔でもあった彼が二〇〇四年以後来日が途絶えていて、インターネットで見る彼のレッスン風景には、常に手の甲を覆う手袋を纏っている姿から、手指の状態があまり芳しくないのではとの懸念もありましたが、一方では、かつて「マズルカ賞」を受けたほどの定評のあ

るフリー・ツォンが、二〇〇五年に新しく録音したショパンの『マズルカ集』（一八四九年製エラーールピアノによるワルシャワでの新録音）のCDを出したほか、上海その他でもいくつかの演奏会を行っているとのニュースが伝えられていた。その矢先に、ロマン・罗兰研究所の招きに応じて、九月三十日「京都府民ホールアルティ」でのたった一回限りのリサイタルのために来日してくれるという、まさに夢のような話が実現する運びとなったのです。

選曲については、ロマン・罗兰とのつながりからベートーヴェンという声も無くはなかったようですが、ロマン・罗兰だってベートーヴェン一辺倒ではなくヘンデル、バッハ、ハイドン、モーツァルトその他多くの古今の作曲家や作品について語り、『ジャン・クリストフ』ほかの作品にも登場させているのだから、敢えてベートーヴェンにこだわる必要はないと言うことで、フリー・ツォン氏の意向に沿ってオール・ハイドン・プログラムに決まったようです。ただしそのプログラムが単純に、本年は「ハイドン没後二百年」だからハイドンに合わせた、というのではなく、フリー・ツォンが長年にわたって、特にここ数年集中的にハイドンの作品に取り組んできた末に辿り着いた帰結としてのハイドンを、意義深い今年しかも突然決まった今回の公演で私たちに披瀝してくれるというのである。

それだけに第一曲目のソナタ第三十一番から第四十七番、第五十九番と続くソナタ、その音色の美しさと心地よい響きとリズム感、それに低音の豊かさも特筆に値すると感じました。時に顔を左右に激しく振りながら速いパッセージを難なく弾き進める演奏には手指の不安などまったく感じさせない。それらのことはやはりナマの演奏でこそ体感できることです。

ハイドンのピアノ・ソナタの多くは皆がよく知っているポピュラーな曲ではないが、哲学的思索や激情を、力押し切っていくタイプのベートーヴェンとは対照的に、端正な中にも熱い思いを織り込んだ、わかりやすく、楽しい演奏であったと思う。私にとってこのリサイタルは間違ひなく生涯の思い出に残る感動のコンサートでありました。

この素晴らしいコンサートの実現のために、多くの情報とさまざまな繋がりを結集し、準備から実現まで尽力下さっ

たすべての方々に感謝せずには居られません。私には今後、再びフリー・ツォン氏の演奏が聴く機会がないかも知れないと思うと、この演奏会場に私が身を置き、そして彼の手から紡ぎ出されたナマの音を直に聴けたことは二度とない貴重なる幸運でありましたし、その演奏中の姿と音楽の余韻は私の頭から決して消えることはありません。

（評議員）

深い魂の叫び

—— ロランからフリー・レイへ、

そしてフリー・ツォンへ ——

森 内 依理子

「ロランは音楽家の伝記を書いているが、ただ技術的なことを書いているのではなく、そこにはヒューマニズム、深い魂が流れている。だからこそ、今日まで私たちを引っ張ってきたのだ。」とも、フリー・ツォンさんはおっしゃったそうで、演奏会の後、対談をされたロマン・ロラン研究所の理事長さんが、その大切なことをみなさんに翻訳し忘れた、と残念がっておられたと伺いました。

小雨に煙る京都での珠玉の一夜を思い出すたびに、今でもあの素晴らしい演奏会は、いったい何だったのだろう、と思うのです。まるで奇跡のような演奏…。

いまだかつて、こんなに一人のピアニストの演奏に強く引き込まれたことはありません。私は専門家ではないので、細かいことはわかりませんが、ともかく、一音一音が生み出す音楽に心が揺さぶられ、演奏者の魂の鼓動が伝わってくるような、とても表現すればいいのでしょうか？

その感動は何なのだろう。この人の演奏のすさまじさは…。

これまでまったく無知だった私は、興味を持って二冊の本を求めました。

森岡葉氏著の『望郷のマズルカ』と榎本泰子氏訳の『君よ弦外の音を聴け』。

そして、より詳しくフリー・ツォン氏の境遇を知ることとなりました。

命がけて人生を生き、音楽を愛した人が奏でる音は、ただただ楽譜に書かれたものをそのとおりに演奏するだけでは満たされない多くのことを私たちに伝えるのだ、ということ。それをあらためて感じ、心より感動いたしました。

ロマン・ロランが求めた平和と愛。それを愛する自国民にも知らせたくてロランの著書を中国語に翻訳、紹介した父、フリー・レイ。

息子の音楽の才能を最大限に伸ばしてやるために息子を心から応援し、留学した息子に暖かい励ましや助言を送り続けた父も、文化大革命の勃発と共に、己の居場所を失い、とうとう自殺に追い込まれてしまう。そんな両親、家族の辛い立場を心から憂慮し、悲しみながらも、益々、己の道に精進したのであるう息子、フリー・ツォン。

あまりにも過酷な時代背景の中で、耐え忍びながらも音楽を見失わずに強く生きたフリー・ツォンにしか紡ぎ出せない音、というものがあるのですね。

あの奇跡的な一夜は、そんな中、生み出されたのだ、と強く感じました。

平和を望まないものなど居ないのに、人は、正義の名のもとに殺戮を繰り返し、幸福だった家族はむなしく離散していく。それを憂い、戦争反対を唱え続けたロマン・ロラン。

その精神は深い魂の叫びとなり、脈々と今に受け継がれて来たのだ。と、あらためて感じました。

「日本・ロマン・ロランの友の會」創立六十周年記念の記念行事に当たり、万難を排してフリー・ツォン氏の招聘、演奏を実現してくださったロマン・ロラン研究所のみなさまに深く感謝申し上げます。

(賛助会員)

傅聰（フー・ツォン）演奏会 二〇〇九年、京都



亡命先の英国より帰国、上海での傅聰演奏会（1979）

メニユーインとともに 一九六〇年代



ロンドン交響楽団との協演広告と傳聡 一九五九年





九、三脚架、椅子、在故宅家之陈设物、亦被（保全）注代
道款。此等陈设物共（三）件（当时被劫、注代、未箱
重、将来待家藏时、由注代款。尚有陈设物、
向周菊芳便知、
十、擅自用奥本故宅自动写手錶一、又擅自手錶一、
本拟给张克与□□□、但恐妨碍他仍留政治立
场、故让人秀自由处理。
十一、现钞、元、作为我伯父薪费。
十二、故宅家借用之家具、由陈叔南按单收回。
十三、自有家具、由你处理。图书字画、听你一家
决定。
使你为我伯父受累、实在不安、但也别令他人可托、
活之、
一九六六年九月二日 梅馥 夜

傅聰の父、傅雷（フー・レイ）はロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』の翻訳をはじめ西欧文化の中国への紹介者として知られる。彼とその妻、梅馥（上の写真）は「文化大革命」さなかの一九六七年、自ら命を絶った。その遺書（下の写真、末尾部分）は政治が文化を虐殺した例として人々に衝撃を与えた。

Villeneuve (Vaud) Suisse - villa Ulys

30 juin 1934

Cher Monsieur Roux-Rouba

Merci, tardivement, votre bonne lettre
du 3 mars, je vous en remercie

Je suis heureux de savoir que vous
avez traduit mes trois Vies de Beethoven,
de Michel-Ange et de Tolstoy, que vous
songez à les publier en chinois.

Nous sommes dans une époque où
s'est rallumée l'immortelle flamme
de l'humanisme ; - avec elle s'est ravivée
le culte des livres. - Mais cette flamme

Bien cordialement à vous,

Romain Rolland

ロマン・ロランの傅雷への手紙 1934
ロランの伝記三部作、中国訳への謝辞など

『最後の扉の敷居で』から 9

村上光彦

資料五十一——（承前）

ロマン・ロランは古今東西の神秘思想家に深い関心を抱きつづけた。「わが病の手帳」には十四世紀のドイツ人ドミニコ会士タウラーからの数行の引用文が見られる。

「魂の根底をなす深淵（……）それはときとして地面（または底）と、またときとして魂の梢と名づけられる。魂はこの底にあつては、〈神〉との言うに言われぬ類縁性および親近性を有する……。魂のこのもっとも奥深い、もっとも内面的な、もっとも秘められた底にあつては、〈神〉は本質的に、現実的に、また実質的に存在する」。

祈りにかかわる数行。

「わたしは全生涯をつうじて——とりわけ一九〇〇年の試練と孤独（そこから『ジャン・クリストフ』が生まれたのだが）に逢って以来——それも終局に向かって進みゆくにつれて——信じていようといまいと祈ってきた。

晩方、短くとも熱烈な祈りを唱えてからでなくては、わたしは一度として枕上で目を閉ざしたことがない。だれに向かつて？ わたしは、そのことをあまり明確にしようとはしなかった。私を立ち超える内面の諸力に向かつてである。（わたしはこのことについて『ジャン・クリストフ』のなかでできるだけ自分の気持ちを言いあらわそうとした）。——それはわたしにとって、やむにやまれぬ本能的欲求であった。そして理性には、その欲するところを思考してもらおう！

ロランはつねづね、もっとも親しい死者、とりわけ最愛の死者である母親のために祈っていた。彼はこう記している。「思うに、これは人類の根元そのものに錨を下ろした崇敬なのである。わたしはずっと、わたしの生をこれらの亡くなった道連れたちと結び合わせてきた。その点を明確にすることはできないままできたとはいえ、思うに彼らはカトリック信者にとつての聖人に相当するものだったのである。つまり、神的〈諸力〉への仲介者であった」。

ロランはクロードルの小冊子『祈り』を読まないうちから、病床で「アヴェ・マリヤ」を唱えるとき、「マリヤ、〈神〉の母」という《単純で、しかも心を揺さぶる三語》から強い衝撃を覚えたという。彼は発病前にペギー研究を進めるなかで、ペギーが人生途上の試練のさなかにあつて何ヶ月ものあいだ「主の祈り」を唱える気になれなかったときにも「アヴェ・マリヤ」を頼みの綱としていたという事実に着目していた。そしてロランは、クロードルの「祈り」を読んで、その感動をあらたにしたのだった。

「われわれはみずから〈神〉を見ることはないのであるが、この〈神の母〉がわれわれの身近にいてくださつて、われわれの祈りを変容させるために（そして伝えるために）陽光に照らされつつ〈神〉を見つめておられる……そしてマリヤは、そこに、われわれの面前に、目と目とを見合わせておいでくださる……」（クロードル）。

そしてロランもまた病床にあって、〈神の母〉と唱えながら本能的に口を動かしたのだったが、彼はそのさい《人々の母》と補って唱えたとのことだ。「なぜかと言えば、マリヤは〈人の子の母親〉だったのであるから」。

二月十二日の夜、ロランは痙攣的に咳込んで、小止みなく息が詰まりそうになっていた。真夜中の直前だった。

「わたしは幻を見た。北フランスのどこかに（わたしにはそんな気がした）水が漫々と広がっているなかに、鐘楼のある小さい礼拝堂があった。——そしてその礼拝堂から、一羽の燕（アロンド）は燕を意味する古語」（そういう単語がわたしの口に浮かんできた）が飛び立ち離れて——それとも二羽——それとも二羽にしてじつはただの一羽——だったのか——水の流れに沿って水面すれすれに去っていった。わたしはその燕をわたしの（二人の）母（母親と祖母）と同一視していた……。——それは一瞬のことであったが、咳も窒息も止まった（それはもう戻ってこなかった）。わたしは願ってやまずにいた安息に落ち込んでいった。深夜の十二時を打つ音は聞かなかった。その眠りから覚めて出たとき（あるいはおそらく、すでに眠りに沈みかけていたとき）、わたしは思った。《これは〈アロンド〉の奇蹟だ》と。

それからというものの、わたしの心情は（わたしの理性は降参しないのであるから、理性の外側にいながら）〈母〉との一種の秘めやかで感謝にみちた交わりのうちに留まってきた。そして〈母〉がわたしのことばに聞き入っているような気持ちがしていた」。

ロランの妻は、夫の重態をまえにして動転していた。彼は妻のその様子を見ながら、「いきなり心の躍る思いがして、思慮するまもなく彼女を〈われらの母〉に《奉獻》した。すると彼女はほとんどたちどころに（わたしはそのことを彼女になにも告げなかったのであるが）並々でない心の安らぎを覚えたのである。内的諸力の逆説的な働きかけ

を受けて、わたしは自分から——わたしの理性は頑として信じようとしなのに——その晩方、彼女をうながしてわたしといっしょに『アヴェ・マリア』を唱えさせた」。

ロランの性質にはふしぎな二元性があった。彼の理性は確固として穏やかなうちにも不屈の不信をつらぬき、信仰の根拠としてどのような論議を聞かされても平然として動ずることがなかった。それでいて他方では、彼の《心情の本能》のほうは、祈りの躍動に心を任せるのだった。これはロラン自身が言うには、昔から何世紀にもわたって、信ずる魂たちの大河が地下を流れてきたためであって、彼はこうして理性と心情とを二つながら別々の仕方で尊重しつづけたのだ。この二通りの性向は、たがいに相手を動かす力はないのに、さりとて衝突することもなかった。彼は言う。「思うに、わたしはみずからの天性のこの二つの大道を、そのいずれをもけつして断念することがないであろう。わたしはその双方への忠実を守るであろう。それがわたしの義務なのである」。

病中、たわいのない想念が浮かんでくることがあって、そのあいだに彼の脳裏には〈神〉が一度ならず、それも奇妙な道化た形をとって現れたのだった。「たとえば、わたしは目を覚まして妻を呼ぶと、ひどくせかせかこう言った。「〈神さま〉がわたしになにか数字を言われたのだよ……。その数字を思いださなくてはいけない。さもないとわたしたちは、みな晩にならないうちに死んでしまう」。

そして彼は手当たりしだいの本をもってこさせて、その数字を探し当てようとしたが、もちろん、その数字は見つからないのだった。

病中、彼はリュシヤン・フェーヴル（アナル派の歴史家）がラブレールについて書いた『十六世紀における無信仰の問題』、クロードルの『祈り』、『縋子の靴』、ラブレール、レンブラント、彼自身がインドについて書いた本などを読んだ。しかし、病気にならないうちに読んでいたペギー関係の本には、わざといっさい手を出さなかった。

資料五十二——「ロマン・ロランの日記」——（抜粋）

以下の日記は、一九四三年四月に書きとめた、クロードルの来訪について記したものだ。クロードルは四月五日（月）から七日（水）朝まで、ヴェズレーのロランの家に泊まったのだ。

「このまえ、二年前〔正しくは三年前の一九四〇年四月〕に来てくれたときもそうだったが、わたしは病室で彼に應對した。まだ病室から出ることを許されていなかったのである」。

クロードルの風貌——、「彼は背が低く、幅と丈とがほぼ等しい。頸は広い両肩のあいだにめり込んでいる。——顔はいくぶん牛のようで、幅も広ければ縦も長い。目は青く、おちょぼ口で、入れ歯がかさばるものだから膨れ上がっており、そのせいで発音にくそうである。見た感じはたいそう頑丈で、骨組みががっしりし、両脚に堅固に支えられている。パリから着くとすぐ（朝五時に起床、七時に出発してきたのである）、この七十五歳の男は大聖堂まで急坂を登っていった。正午にはおおいに、しっかりと食べ、晩は小食である（ポタージュと野菜）。そしてぐっすり眠った」。

無骨さ、礼儀正しさ、内気さが混ざりあい、気分屋なところを制御できず、自分でもそのことを知っているために、不愉快になったり魅力的になったりする。

ロランが病氣中の夢や幻の話をして聞かせると、彼はたいそう感動し、そこに〈神〉の手を見ようとして、ロランに「この呼びかけには応答しなくてはいけない」と言った。

ロランが神性について独自の考え方を述べても、クロードルは思いがけなくものわかりよく反応し、ロランが聖書

への疑念を述べたところ、「そういうことは気にしないでいい！ 神の父性を信ずれば十分だ……。ただ〈愛〉だけを信じたまえ」と言った。しかし、一見もののわかったような言い方をしながら、結論は「聖体拝領をしたまえ！」

〈神〉はきみを待っている」というところに落ちつくのだった。ロランのほうでは、クローデルから彼の信仰について説明を聞きだして、彼が辿った道を教えてもらいたくて当たってゆくのに、いつもこの返事にぶつかるのだった。《服従の行為をした曉には、しかるのちに信仰はおまけとしてついてくるにちがいない》のだし、そもそも信仰は《聖体拝領において完全なる帰依をすること》からやってくるものらしかった。そこでロランが《では、信仰においてそのように帰依するにはどうしたらよいのか》と問うと、クローデルはこう打ち明けた。伝達可能な仕方のみずからの信仰を打ち樹てることは自分にはできないのだ、と。「彼は自認する。『聖書』への彼の絶対の信仰を説明するには、ごく幼いころからずっと信じてきたということを別にすれば、言うべきことはいっさい見あたらない、というのである」。

クローデルは『新旧約聖書』を双方とも暗記しており、その長い章句をラテン語で引用してみせた。彼は、ラテン語と、若いころに愛した詩については、並々ならぬ記憶力を発揮した。ロランが病氣中に貴石で舗装したテラスの夢を見た話（『最後の扉の敷居で』から「第八参照」）をすると、クローデルはさっそく反応して、「エステル記」から章句を引用して聞かせた。ロランによると、クローデルは〈神〉をこのように見ている。「彼の〈神さま〉はたいそう好奇心がつよい。彼は自分の姿に似せて〈神さま〉を見ていて、〈神さま〉のことを、氣むずかしく、激越で、復讐心が強いものの、弱気で変わり身が早くもあって、自分と論じあっている人たちの理屈に賛同したりし、必要とあれば前言を取り消しもするように見なしている。彼はまた〈神さま〉がわれわれとともども、われわれ同様、宇宙の悪のゆえに悩んでいる、との見方もしている。（この〈神さま〉は、わたしが『燃える茨』（『ジャン・クリストフ』参照）の章で描いたわたしの〈神さま〉と、そう隔たってはいないような気がする！）——彼にとって勘弁ならない

のは、みずからの正義や冷えびえとした静穩さに凝り固まった非情の〈神〉の姿なのである」。ロランが言うには、クロードルは、イザヤ、ヨブ、預言者ハバクク（『旧約聖書』の「ハバクク書」は、「主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのに、いつまであなたは聞いてくださらないのか」との訴えで書き起こされている）と心を通い合わせ、また聖ヨハネと聖パウロ（もちろんプロテスタントではない！）をなによりも愛している」。

クロードルが言うには、もしひまがあったらのことだが、彼のヴェズレー訪問からなにかしらすばらしい伝説——新編『縐子の靴』といった——が生まれ出て、そのなかではマリーとロラン自身とに名誉ある地位が与えられる、とのことだった。ロランが彼に病氣中に見た夢の話をする、クロードルはそれを彼自身の流儀に応じて変容させるのだった。ロランは日記にこう書きとめた。——「そこでわたしのほうは、くたびれてどうでもよくなり、そうそうと同意しながらも、伝説がどのようにして作りだされてゆくものかを感じとっていた」。

資料五十三——「レーモン・ピシャル神父からロマン・ロランあて」（一九四三年四月十五日付）。

ロランがピシャル神父にあてて自著〈偉大なる創作の時期Ⅳ〉一『第九交響楽』を送ったのにたいする礼状。デュシャトレ教授は、この手紙に付した注のなかで以下の説明を加えている。ミサの章句のなかに、ミサを挙げる神父がパンとぶどう酒とを奉獻しながら唱える決まり文句があり、〈教会〉のみならず、〈教会〉にとって大切な人たちのためにも仲立ちとなる奉仕者たちに言及している。「おん身がその信仰と愛着とのほどをござんじであられる」……奉仕者たちのことを「……」彼らの救いと幸福のために「……」思いだしてくださいませ」と。

ピシャルはロランへのこの手紙の初めのほうで、彼にこの定式化した祈りを想起させ、その祈りのことで彼自身でなく〈神〉に感謝してほしいと前置きしている。さらに、神父はこう述べる。

「〈神〉は驚くべき戰略家であられて、わたしたちのまわりにおん企みの糸を織り上げていかれます。人間はだれもが〈神の愛〉が浸透してこないように城壁を築いて対抗しようとするのですが、〈彼〉はわたしたちに知られることなく、わたしたち全員をご利用あそばすのです。そして人はそれぞれほかの人にとって〈神〉の啓示であり、みこころの使者であり、また恩寵がしみとおってくるステンドグラスなのです〔……〕」。

神父によれば、小説家には〈神〉に似たところがある。「小説家は献身的なるがゆえに、他者たちを養うために自分自身を与えると言っても間違っていないのではございませんか。〔……〕隠れた〈神〉は秘跡をつうじて、自分から取り去っていかれるものによって、わたしどもにおんみずからを糧としてお与えになります」。神父が言うには、小説とは一種の秘跡であって、作家はみずからの身を隠しつつ、その秘跡をつうじて、自分を糧とすることで読者を富ませもし、同時にみずからを引き渡してもゆくというのだ。

神父はロランに向かって、彼が数ヶ月このかたライン地方の聖人列伝を読み返していると語り、そこに見られる《黙示録的想像力》に驚嘆している。「時代を経るにつれて、わが聖人たちの行進は〔豊作祈願〕〔キリスト昇天祭に先立つ三日間に行われる〕の日に唱える連祷の歌にみられる、あの安らかな単調さとは遠く隔たったものになってきました。かわりに、そのなかにはある〈神〉が隠れているのです。多種多様のしるしから見て、隠れた〈神〉が働きかけつつ現前しているのは明白なことでありまして、そう思うとわたしたちにとって一種の義務が生じてまいります。ニール教授*は、デュアメルだったかモーリヤックだったかにあてて（そのどちらかだったかわからなくなりましたが）、信頼して任せきる行為のことを書いていましたが、わたしにはその意味がわかります。『X神父がわたしのために羊小屋の戸を開けてくださり、わたしはその群れについていったのです』とありました。それも、なんとという群れでしようか。聖者たちの群れです。結局のところ、それは人類が生みだした最良の果実ではないでしょうか」。

神父はこう続けている。「恩寵は四方八方からわたしたちに押し寄せてまいります。わたしたちの自己は陽の当たった別荘です。数々の秘跡は、〈神〉がその家に入り込んでくるための自然の出口です。——もし窓が閉まっていなくても、光は戸口の下側から、またあらゆる隙き間から染みとおってまいります。そしてまいには、雰囲気全体を浸しきることになるのです。わたしたち目がけて押し寄せてくる〈神〉の大洋上では、わたしたちの船は四方八方から浸水して——全面的に水浸しになり、そして行くところまで行って——陽光に向かって窓を開けるところまで行くのです」。

神父は、毎夜午前三時に教会へ下りて行って朝課（夜明け前の祈り）を唱えるという。その祈りにはこう歌われている。「心を頑^{かたくな}にしてはならない。あのととき、あなたたちの先祖はわたしを試みた。わたしの業を見ながら、なおわたしを試した。四十年の間、わたしはその世代をいとい心の迷う民と呼んだ。彼らは私の道を知ろうとしなかった。わたしは怒り彼らをわたしの憩いの地に入れないと誓った」（『詩編』九十五）。

神父はこの手紙の末尾で、ロランが一九四一年（その下書きに記された日付は一九四一年十月二十日）にクロードルに書き送った献辞に言及している。ロランはそのなかで、彼自身とクロードルとがそれぞれ《大いなる旅》をした、という言い方をした。そこにはこう記してあったのだ。「この大いなる旅は五十年あまり続きました」。

* シャルル・ジャン・アンリ・ニコル（一八六六—一九三六）。フランスの医師・細菌学者。一九〇三年、チュニスのバストゥール研究所長。一九三二年にコレージュ・ド・フランス教授となる。シラミが発疹チフスの伝染媒体であることを発見した。一九二八年にノーベル賞（生理学・医学部門）を受賞。（訳注）

「わたしはこの何週間かにわたる病気の経験のこと、またわたしの見た幻のことを、偽りなく忠実に語った」。ロランはこの記述につづけて、親切で敬虔な魂の持ち主たちが彼のために捧げてくれた祈りからじっさいに恩恵を受けた、と語っている。しかし彼は一方で、《教会》が彼に攻撃をかけてくるものを予想していて、妻を介して予防線を張っておいたのだった。たとえば親しくしていたジャンヌ・モルティエは、ロランの発病を知るとすぐに彼の妻にこう書いてよこした。「もしロランがよくないほうへ向かってゆくようならお知らせください。わたしども、わたしとB(ベルナル)神父とは、最初の列車でかけつけますから」。マリーはこれに答えて、いま来てもらっても都合がわるいし、ジャンヌのほうはあとでいくぶんか助けになるかもしれないけれど《神父のほうはなんの助けにもならないだろう》と書いてきっぱり断ってしまった。ロランは括弧内でそこにこう注記している。——「(このことばが加えた傷がいつかは忘れてもらえるかどうか、疑わしい)」。

ベルナル神父は以前に二、三回ほどロランの家を訪ねてきたのだが、マリーは彼をやんわりと押し返してしまっただった。それにマリーがミサに出てこないものだから、B神父はマリーのことを《頑固ばあさん》扱いしていた。もっともマリーのほうでは、自分は《うちで〈神さま〉にもちゃんとお祈りしている》と言っていたのだ。

さて、心やさしい教会関係者たちは、ロランがクロードルに書き送った献辞のせいで彼の《教会》復帰への期待をつよめていた。そこで、彼らは四方八方からロラン包囲陣を固めていたのだ。ロランはビシャル神父からの手紙のことを《何ページもの、愛情のこもったお説教》と呼び、さらに《教会》はそのなかで、手袋の下側から早くも鉤爪(それも無器用な)を剥きだしている》と評している。ロランにとって不満だったのは、これらの好意的な信者が

ロラン自身にとっての最大の論点をよけて通っていることだった。

「わたしは感心してしまうのだが、これらのまじめな信者ときたら、みながみな、ほんとうの問題——キリストの、『福音書』の、『聖書』の、秘跡の、さらに〈教会〉の神性を信するか——それとも信じないか——という問題を、なんとまあよけて通ってしまうことか。——彼らはこのことがらをすでに解決済みだとみなしている。——そして彼らは、教団なり儀礼なりへの服従を説こうと努めている。〔……〕ところが、彼らのなかのだれひとりとして、他人にそのことを急いで立証しようとは思わない（それにはそれ相当のわけがある！）。『まず信じなさい！ あとのことはすべて、おまけとしてやってくる……』。そうなのであろう。しかし、どうしたら信じられるのか。わたしたちには、その秘訣は渡してもらえない。また、『福音書』からの例がかならず引き合いに出されるが、まさにそれらの例はわたしたちの状況にはさっぱり適合しない。それというのが、『福音書』中の人たちは信じたのであって、——すなわち彼らは〈主〉がそこにいたのを見たのであって、——したがって彼らの手柄はあまり大きくはなかった。わたしたちにしても、見ることしか求めてはいない。——そのときまでは、公正にこう言わざるをえない。——『わたしにはなにも見えません』と」。

資料五十五、五十六——ミシェル・ド・バイユレ神父が一九四三年四月二十八日および五月一日にロランあてに打った電報。神父は四月二十八日にヴェズレーを訪れる予定にしていたが、事情があつて五月一日まで行けなかった。

「ド・パイユレ神父が何日かうちに泊まった。

まっすぐに、飾り気なく、誠実で、率直な人である。ほかのどの司祭にたいするより気が合うと感じてきた。彼はいつでも隠すことなく、わたしにこう語った。——キリスト教は、理性にたいして妥当な証拠をなにひとつ差しだしてはいないし、彼らの教団の大博士である聖トマスそのひとからして、その生涯の末ごろにはみずからの作品をいっさい重視せず、それらを埃同然とみなし、死去する以前にはもはや『雅歌』への神秘的感動しか書き記さなかった。キリスト教は、ぜひ知性によって信じられるようでありたいなどと願ってはいない。それはただ知性にたいし、信じようがないと思われるような隙を見せまいとするにすぎない。彼の属する教団は別である。P神父が思うには、それは一種の義務による(より正当に語ろうとするならば、彼はこうも言えよう、精神的必要による)ことである。心情の命令なのである」。

ランは神父に病中日記の一部を読ませた。すると、神父の意見では、彼は《すでにキリスト教徒の交わりコミュニオン(共同体)のなかにいるのだから、これ以上そのことを気にすべきではない、それは〈神〉のお仕事なのだ》とのことであった。ド・パイユレ神父は、クロードルや若いピシャル神父とはちがって、精神的に無理を加えることには反対だったのだ。「啓発され、かつ公正な魂にたいしては、圧力を加えるべきではない。その魂がそう求めるのなら別だが、魂と〈神〉とのあいだに介入すべきではない」というのだ。

資料五十八——「ロマン・ロランからマドレーヌあて」(一九四三年五月八日、ヴェズレーにて)——(抜粹)

ヴェズレーの主任司祭が定期的にロランの家へ攻撃をしかけてきたが、ロランに会わせてもらえずにいた。主任司祭のほうでは、ロランがクロードルやド・パイユレ神父には会ったのを知っていたので、なおのこと心を傷つけられていた。しかしマリイは、トリニテ修道会の修道士たちに主任司祭への対応を依頼した。彼女はのさばる彼らに向かって、自分は祭儀や聖遺物の功徳を信じていないが、自分なりに善良なカトリック信者のつもりでいる、と語った。修道士たちは結局彼女の言い分を承知した。ロランはというと彼の妻について妹あてにこのように語っている。要するに信仰の種類からいって、ペギーの独立心のある信仰のほうが、クロードルの信仰よりも彼女にとっては近づきやすいのだ。しかし、クロードルには預言者の息吹をつたえる大詩人の風格があるから、彼女は彼に征服されてしまったのだ。そうはいっても、彼女は遠慮なしにクロードルのことを批評している、と。

この手紙によると、ロランはあいかわらずベートーヴェン研究の校正をつづけ、また《ペギーの精神的肖像》を仕上げていった。さらにひまひまには、最近刊の『福音書』注釈書を貸してもらって読んでいた。ロランは『歴史的批判方法』による研究しか認めなかったので、近ごろのカトリック系研究所での研究に満足を感じていた。ロランが挙げている研究所には、たとえばラグランジュ神父が三十年にわたって指導にあたってきたエルサレムの〈聖書研究研究所〉の雑誌——ガバルダ(ルコッフル)社から刊行——がある。

「——興味ぶかいことがあるよ。そしてわたしはこの点を確認して楽しい思いをしているのだが、最近出されている結論のなかには、わたしの直観なり本能なりと合致するものが見られるのだ。たとえば『ヨハネによる福音書』は、かつては歴史的にはいくぶん信用できないとされ、たんに形而上的感動を天才的に吐露したものとみ

なされたにすぎなかったのが、いまではほかの三つの共観福音書よりも精確かつ直截的な歴史的証言と見られるようになってきたのだ。そして、まさにその点こそ、いくつかの物語を読んでわたしの心を打ったことだったのさ。わたしはこう考えたのだった。「ヨハネは《その場にいた》。だが、マタイとルカとはその場にはいなかった。彼らは聞き書きによって語ったのだね」。

ロランが妹に言うには、最近の聖書釈義によれば「マタイによる福音書」の構成方法は、別々の日時の事実をいっしょに並べてゆくことにあった。ヨハネはというと《表皮がこまやかで柔軟な老人の記憶》に残る印象を述べたもので、《ほかの人たちは忘れていても彼にとっては真新しい、遠く離れた回想》を述べている、というのだ。ロランは妹にこうも打ち明けた。

「きみは、ぼくがカトリック的になっていくように思うだろうね……。そんなことはなにもない。だが、これまでずっと、読んだり聞いたりしたことがひどく見当違いだったことがらについて、もっと仔細に読むのが好きなのさ。きょうは、きみに書くのに別段新しいことなどなにもないので、いま読んでいることを知らせるわけだ」。

資料五十九——「ミシェル・ド・パイユレ神父からロマン・ロランあて」(一九四三年五月九日、パリ)

ド・パイユレ神父は、ヴェズレーで受けた歓待に謝辞を述べたあと、キリストへの信仰にとって必須な精神的・道徳的義務の特質についてつぎのように説明している。

「キリスト教の真理について論証的証拠を示すことは不可能です。神的な真理は、その性質そのものによってわれわれ人類の知力を超えております。人間の知性は、いかにも長きにわたる努力をもってして、《神》の实在と魂の不

死とにかんしてならある程度の確信をかちとることができます。しかし、人知の自然な力はそれより先へは進まないのです」。

しかし神父はこれに続けて、人間には知性とともに道德意識・良心もそなわっており、そこには《数々の偉大な永遠の原則が反響している》と述べる。つまり〈善〉を行って〈悪〉を避けるという原則であって、〈神〉はそうした仕方で（カントの考えでは唯一の仕方で）人間の内心に入り込んでくるのだ。彼は語る。「しかし〈神〉はわたしたちに別のことも要求しておられます。すなわち、わたしたち自身を超克せよ、わたしたちの知性の自然な限界を越えよ、〈神〉おんみずからの神的な光から超自然の完全を受けとれ、と誘いかけておられるのです。そしてそのために、わたしたちに謙虚にみ弟子となるよう、まず信じて、しかるのちに見るようにと誘いかけておられます」。

神父が言うには、人間は理性的推論によって真理に行きつけるのではなく、証しに帰依するように求められるだけなのだという。神父は語る。「外的な証し、《信憑性》の論拠、キリスト教の真实性に味方するような《あのひとつに収斂してゆくしるしの束》があります。しかし、〈神〉おんみずからに発した内面的証しがないとしたら、そうしたものは僅かしか重要性がないでありましょう」。そして神父はここで聖トマス・アキナスのつぎの意見を援用している。

「信ずる者には、彼を信ずるように仕向ける十分な理由がある。じっさい彼は、奇蹟によって裏書きされる神の教えの權威によってまた、さらに重要なことであるが、〈神〉のうながしという内的本能によって、そのように仕向けられもする。つまり、かるがるしく信ずるなどということはない」。

神父は《奇蹟》という語にこのような注を付している。「奇蹟」という語は総称語です。それはキリスト教の教理を《驚くべきもの》に見せるすべてのもの、つまりそれが内包する中味、その永続性、その超人的美しさ、その他です。つまり、この教理に神的封印のしるしを付するすべてのものであって、たんに《超自然的な事象》ばかりとはか

がりません。イエス自身、超自然的な事象は信仰にとってあまり役に立つものではないと語ったことがたびたびあります。「もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう」(「ルカによる福音書」十六―三十一)。

ド・パユレ神父はさらにこう語っている。《わたしたちが話しかけている魂たちの内側において、〈神〉おんみずからこそ、限りなくより力強い証しをつうじて働きかけておられる、という確信(……)》。

また神父は「ヨハネによる福音書」(六―四十四)から、キリストのつぎのことばを引いている。「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない」。そして神父は、この語句への感想をこのように述べている。父なる〈神〉がこうして引き寄せておられるからには、信者は愛でもってこれに応じなくてはならない、と。そして神父は記す。「わたしたちはなによりもまず、父なる〈神〉への愛を信ずるのですから」。神父はこの意見を補強するために「ヨハネの手紙一」(四―十六)からこの聖句を引用する。「わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています」。しかし、彼は続けて私見を述べている。

「わたしたちの心情は、わたしたちの理性にたいして優位に立っております。ただし、心情がじっさいに理性の当然の要求に異議を唱えるわけではありません。しかし、ばあいによっては、つまり理性が決定的にあまりに薄弱で判断を下すことができないはずの論点について、理性がなおもとめどなく議論しようとするときには、心情は理性にたいして黙るように強制せざるをえないのです。信仰のうちには、信頼と服従ともあれば、さらにほとんど任せざる信徒もあります。しかし、それだからといって、みずからの信仰についてこのうえない確信を抱いている信者においてさえ、理性が絶えず不安に思ったり疑念を発したりすることなどだけあってありえないように考えてはなりません。信仰の行いをしているさなかであっても、精神のある種のざわめきはいつでもあるものなのです。同意による安息と、探求の不安とは、同一の埒^る塙^はのなかで神秘的に混ざりあっているのです」。

本稿をここまで追ってこられた読者におねがいのだが、ロマン・ロランがド・バイユレ神父のこの手紙を読み進めながらどのように感じたか、その心事を想像していただきたい。たとえば先に資料五十四で見たとおり、ロランは心優しい信者たちの心づかいに感謝しながらも、なおかつ彼らがロランにとっての《最大の論点》を正面から受けとめてくれないことに不満を覚えてきた。

理性の人であるロランにとっては、キリストが《人の子》でありながら《神の子》でもある。すなわちキリストの《神性》を信ずることは困難きわまる問題だったのだ。ことは懐かしい母の心に関わるのだから、彼がこれをなすがしろにできなかったのは言うまでもない。また『聖書』の語るキリストの伝承は、彼にとっても物語としては愛することができた。しかし、彼がまさに《神》から受け取った理性にとって、キリスト、『福音書』、『聖書』、『秘蹟』、『教会』の神性というものは、論理の階梯を無視して信ずることのできないことだったのだ。

本稿の読者は、ロランが最晩年の日々によっての最大の重要問題と取り組んだときの姿勢は、要するに解決不能の問題の周囲を堂々めぐりする姿だった、と感じられるだろう。そして本稿についても、同じ主題をめぐる繰り返しばかりだと感じられることだろう。しかし、もっとも重要なこと、人生の最終の本質的問題については、ロランのように誠実に繰り返し堂々めぐりするほかないのかもしれない。

ともあれ、ド・バイユレ神父の誠実さには心を打たれる。それにしても、神父が真率にロランに語りかけたことが、相手の考え方に共感をこめた理解を示しつつも、ロランにとってつまるどころ彼岸からの叫び声だったのも確かなのだ。神父なればこそ、ド・バイユレ自身は《神》に信従して任せることができた。しかし、神父が彼岸から投げかける救いの網をつかみとうろにも、ロランには最終的には信従が必要だった。ところがそれは、彼にとって踏み切ることでない一線だったのだ。さて、神父は精一杯の理解をこめて、手紙の末尾でこう呼びかけた。

「このような次第であればこそ、わたしは先生にこう申し上げてきたのです。先生は、《信仰》のまぢかにおられ

ます。たとえすでに〈信仰〉をおもちというわけではないとしてさえも、また先生の理性はお見受けしたところ、いまだそれに十全の同意をしておられるわけではないとしても、そのとおりなのでございます」。

資料六十——ルイ・ベナル神父からロマン・ロランあて（一九四三年五月九日）。『偉大なる創造の時期Ⅳ』の送付を受けたことへの礼状。

資料六十一——ジャン・サンソリュール神父からロマン・ロランあて（一九四三年五月十三日付）

ジャン・サンソリュールはロランに向かって、『わたしの司祭職の準備の刻印をしるしてくださった』という言い方をしている。

「もとより、わたしは一度として先生のことを忘れたことはありません。それというのも先生は二度も決定的啓発をなさってくださいった方だからです。初めてお訪ねしたさいに、つねに限りない認識に向かおうとする探求に伴う、精神の功德と劣等複合とが話題になっていたのですが、先生はご病体を休めておられた肘掛け椅子からだしぬけに立ち上がられ、こう叫ばれたのです。——『そうだと、知性の理想はへりくだりだ！』と。〔……〕その瞬間からこのかた、先生はわたしにとって、『ジャン・クリストフ』や『ガンディー』の著者である以上に、わたしの人生における、わたしの大いなる霊的な光であられたのです」。

また別のときには『信仰のない探求者たちと神学者たちとを分け隔てる、妥協を許さぬ真理に立ち向かう態度——主張などをはるかに立ち超えた——について』説明するさいに、ロランはサンソリュール神父に向かって、「彼らの信

仰は傲慢だよ」という《恐ろしい裁き》を言い渡したのだという。そのことばを投げつけられたとき、サンソリュー神父にとってみずからの信仰は探求と同じく《真理への限りなき渴望》でもあっただけに、彼はそう言われてひどく苦しい思いをしたし、いまでも苦しみつづけている、と語りかける。

さらに彼は《聖ヨハネ・グループ》と称する司祭集団についてロランに説明している。サンソリュー神父は、《傲慢》と言われたとき、それがロランから発した評だけに苦しい思いをしながらもそれを押し返すことができず、それにじっさいにも、その批判が当てはまるような人たちもいることを振り返りもしたのだった。そこで彼は、この思い出に《鞭打たれ》で、若くして司祭に叙任されるや、フランス全国と同僚司祭ともども《聖ヨハネ・グループ》の結成に意を尽くしたのだ。それは、《わたしたちにとっては〈信仰〉が探求を挫くことなくその仕事を引き継ぐようにと、さらに愛徳・若さ・滲透の力にかけて探求と競いあえるように》と心してのことだった。

『最後の扉の敷居にて』の編者デュシャトレ教授は、この集団結成について、サンソリュー神父のこの手紙につきのような注釈を加えている。

——「〈聖ヨハネ・グループ〉結成が目標とするところは、当時の神学の窓を開け広げて、世俗文化とのあいだに橋を架け渡すべく、ほかのだれよりも研究に従事している若い司祭たちを文通によって再編成することにある。このような仕方では、正規の司祭集団を補足する組織を提供しようとしたのであった。再生をめざしていた彼の精神ともども、時代がそのことに適合していたのである」。

なお神父はこの手紙の末尾において、ロランが自由に行っているかどうか、健康状態がどうかなどへの切実な不安を表明している。

（成蹊大学名誉教授・仏文学）

青木やよひ氏追悼

永田和子

青木やよひさんが昨年十一月二十五日大腸癌のためお亡くなりになった。八十二歳でいられた。当ロマン・ラン研究所とのつながりは深く、一九九一年六月四日「ロマン・ロランとベートーヴェン」(「ユニテ」19号掲載) 二〇〇一年二月二十三日「人生の秋にロマン・ロランを読む」(「ユニテ」29号掲載) 二〇〇五年六月二十五日「生々發展する魂——ゲーテとベートーヴェン、そしてロマン・ロラン」(「ユニテ」33号掲載) の演題で関西日仏学館において講演をなさってくださった。

青木さんはみず書房編集部勤務の後、フリーライターとなり、エコロジカル・フェミニズム理論とその視点からするベートーヴェン研究で有名な方である。一九八〇年代の性差やジェンダーをめぐる青木やよひ・上野千鶴

子論争はフェミニズム思想史に残る事件であった。また一九五七年に発表したベートーヴェンの不滅の恋人がアントーニア・ブレンダーノであるとする新説は、いまだ世界的な定説となっている。

著書としては『フェミニズムとエコロジー』『フェミニズムの宇宙』(編著) などフェミニズム関係、『ホピ精霊たちの台地』『ホピの国 砂漠のインディアンを訪ねて』などの民族誌、『ゲーテとベートーヴェン』などベートーヴェン研究の著書など多数あるが、とりわけ『ベートーヴェン(不滅の恋人)の探求』のドイツ語訳はドイツ語圏で高く評価されている。訳書にメイナード・ソロモン編『ベートーヴェンの日記』などがある。平凡社新書創刊一〇周年に刊行した『ベートーヴェンの生涯』

は青木やよひ氏の遺著となったが、著者の五十年にわたるベートーヴェン研究のすべてを投入した渾身の力作であり、白鳥の歌である。それはベートーヴェンの数ある伝説を覆し、時代を超越する「自由人」の姿に迫っている。

また執筆の傍ら、津田塾大学、立教大学などの講師を勤め、論文「マルサスの影と現代文明」で一九七五年毎日新聞社日本研究賞を受賞し、夫北沢方邦と「知と文明

のフォーラム」を主宰した。

今年六月十三日（日）十三時開場、東京の津田ホールで青木やよひさん追悼のレクチャーとリサイタルが開催される。高橋アキ氏の演奏でテーマは『ベートーヴェンの生涯』を聴く』として『悲愴』から『ディアベリ変奏曲』まで。『レクチャー』は北沢方邦・西村朗・高橋アキの三氏である。

（理事）

ロマン・ロラン研究所の活動報告

研究所だより 二〇〇九

「日本・ロマン・ロランの友の会」設立六〇年の節目の年でした。

① 六〇年の歩みを発刊できました。

『「日本・ロマン・ロランの友の会」と財団法人ロマン・ロラン研究所 六〇年の歩み』 一八二ページ。すでにお届けいたしました本書ですが、写真説明に誤解を招くキャプションがありました。ロマン・ロランセミナーの講演会が関西日仏学館講演会となっております。場所が関西日仏学館で行われたという意味です。また書籍のISBNを取得しましたのでご報告いたします。

② 研究所の春季開放、オープン三日間 四月四日、五日、六日

四月、哲学の道の桜はいまや京都の桜の名所となっております。一歩外に出れば桜のトンネル。研究所を開放し、ロラン関係の蔵書、ロランがデビューした貴重本「カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ」などご閲覧いただきまして、長年の懸案が実現しました。仲井道子さんが書庫を整備、案内役を買って出てくれました。お茶会のまねごとも、ご歓談、おくつろぎに功を奏したようです。同時開催は会員のチャリティーバザー、ルイ・ルルー作品展と梅染め展示会。初めての試みで不行届きの段お許しください。延べ参加者一〇四人。

四畳半の狭い空間での一服のお茶の親和力、ユニテの心に触れました。和敬清寂。研究所を設立していたころに立ち返り、ご要望もあり、再びおけいこを始めました。師匠は佐々木斐夫先生夫人雅子さま。ご関心のある方はお問い合わせください。

③ 西垣正信レクチャー・ギターコンサート 六月

十三日 ヘロマン・ロランとヘンデル

ヘンデル没後二五〇年の年でロランの『ヘンデル』を読書会で学習し備えました。終演後、演奏者を親しく囲んでティー・パーティがもたれました。

本誌に転載したプログラムの「ロマン・ロラン 音楽学者」の筆者マティアス・ロジェ氏は西垣氏のギターのお弟子さんでギター奏者、加えてソルボンヌで音楽学や音楽史を講じていられる新進気鋭の学者です。その講座こそ、ロマン・ロランが開講したものです。

研究所と西垣さんのコンタクトの発端は日仏の古いつながりでした。フランスでの西垣演奏会の来聴者に五十年前京都で暮らした女性がいられたのです。彼女はなんと名物フランス人オーシュ・コルヌ氏のお嬢様。オーシュ・コルヌ夫人は一〇〇歳を超えて今ニースの近くの施設に居られ、日本語をしきりに話されるので職員たちは戸惑いがちのことです。それを知った西垣さんは赤いバラの花束を持ってお見舞いにいらしたそうです。黄泉の客

となった懐かしいジャン・ピエール・オーシュ・コルヌと宮本正清の話が出たそうです。帰国して西垣さんは宮本正清作詞、中田喜直作曲の作品をしばしば取り上げ演奏されています。

④ フー・ツォン ピアノリサイタル 九月三十日

二〇一〇年はショパン没後二〇〇年で各地で多彩な催しが目白押しです。そのショパンの名を冠したショパン国際ピアノコンクールで東洋人として初めて三位入賞して華やかに国際舞台にデビューしたのがフー・ツォンでした。彼はそのコンクールの審査員を記念の今年も務めるようです。

「日本・ロマン・ロランの友の会」六〇年を記念してフー・ツォン氏をお招きできたのは夢のようです。実行できたのは天から授かった贈り物としかいいようがありません。二〇〇八年の講演「中国におけるロランの紹介者・傅雷」がきっかけとなって、傅雷のご令息で世界的に知られた芸術と政治を背負った偉大なピアノスト、フー・ツォン（傅聡）をお招きしようという機運が高まりました。

た。

初めてコンタクトした時のご返信「ロマン・ロラン、とりわけジャン・クリストフの強い影響を受けた私たちです。ロランの名を冠したロラン研究所からのご招待はとても光栄ですが、最近、手を傷めて、演奏会をすべてキャンセルしている状況ですので、今はお受けできません。よくなれば、また…」(二〇〇八、十一月二八日付)のご丁寧なお手紙に淡い希望を抱き越年しました。初夏を迎えようとした新緑の日に、見慣れぬ電子メールが飛び込んだのです。天にも昇る気持ちでした。

キャンセルが多いとか、新型インフルエンザとか、台風や地震、すべて杞憂に終わりました。ロランと最も深い関係のベートーヴェンが曲目に一切ないことを危惧しましたが、いまだにフー・ツォン ハイドンの感動は消えていません。本誌に寄せられたご感想の一部を収録させていただきます。

困難な道ではありましたが多くの方々のお力を得て成功に導くことができました。フー・ツォン氏へのご連絡先をご教示くださったのは講演者の榎本泰子さん、そし

てフー・ツォン氏との交渉にあたっては、私の思いを翻訳ではなく、すぐそのまま英語におきかえてくださったのは、当研究所理事の長谷川治清氏(同志社大学ビジネススクール教授)です。

⑤ 講演会「犠牲の宗教への問い——ロマン・ロランの思い出に」 十月二十四日

講師はロマン・ロラン専門家であるか否かではなく思想から行動する学者、東京大学教授高橋哲哉氏(フランス思想・哲学)。靖国問題をはじめとする現代社会に活発な発言をされています。多くの著書でも示されているように明晰で示唆に富んだお話を伺うことができました。

*九月四日、伊砂利彦作品・グッツチャリティー・バザー
&寄贈品バザー

*寄贈図書 木下広美さん Claudel 富田溪仙 筆

『百扇帳』 nrf gallimard 1942

*フランス「ロマン・ロラン協会」通信 Cahiers de

Brèves 23, 24 受納

ロランの旧邸、レマン湖畔のヴィルヌーヴのヴィラ・オルガ、この邸宅の現在の主はロランを尊敬する若い同郷人で、ロラン協会会員になり、リエジョワ会長やデュシャトレ教授などの会員たちをご招待くださったそうです。ロランがいつも見ていただろうキッチンからのブルーの眺め、この写真がフランスのロラン協会の今年の年賀状です。

* クラムシー（ロマン・ロラン祖父の創設）

芸術文化協会冊子 Bulletin de la Société Scientifique et Artistique de Clamecy 2008 受納

ささやかな研究所活動にも、六〇年の星霜を迎え、以上のような多彩な記念行事やフランスとの交流ができました。

講師、演奏家、執筆者はもとより、役員、関係各位の皆様がめいめいのお得意分野のお力を発揮、ご提供くだ

さいましたおかげです。そしてこれらの催しのため協賛、広告、チャリティー・バザーで寄付金を賜りました。

朝日、毎日、読売、京都新聞、KBS京都放送の取材をいただきました。

前述のとおりご理解ご協力いただきましたすべての方々にあらためて厚く御礼申し上げます。

情報ファイル 短信

+ 「中国のピアニスト、そしてロランの精神」

榎本泰子氏「みすず」五七八号 十二月―二〇〇九年

+ 「多喜二とロマン・ロラン」高橋 純氏

小樽商科大学 人文研究

第一一八 二〇〇九年十一月

宮本エイ子 記

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一	五・一五	ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）	宮本 正清	一九八九	四・二〇	ロマン・ロランの反戦思想と現代	加藤 周一
		苦悩のなかのインド	森本 達雄		六・九	ロマン・ロラン全集と私	小尾 俊人
一九七二	一一・二七				九・二九	ロマン・ロランの革命劇から——フランス革命二〇〇周年の記念に	中川 久定
一九七三	六・二四	ロマン・ロランとフランス革命	波多野茂弥		一一・一七	ロマン・ロランとの出会いから	
						尾埜 善司・今江 祥智	
一九七三	五・二六	ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心にして	高井 博子	一九九〇	一・二七	ロマン・ロランに負うもの——平和と音楽	
一九七四	一二・一八	私の人間観	末川 博				新村 猛
					六・二	ロマン・ロランとガンディー	森本 達雄
一九七四	六・二九	私の通った芝居の道	毛利 菊枝		九・二六	『魅せられたる魂』と私	樋口 茂子
	一二・五	ロマン・ロラン没後三十周年記念——講演と音楽の夕べ	佐々木斐夫		一〇・二六	占領時代における日本社会とロマン・ロラン	小尾 俊人
			演奏…玉城 嘉子		一一・三〇	ロラン・片山・ヘッセ	宇佐見英治
一九七六	一九七六			一九九一			
七・一一		ロマン・ロランとゲーテ	南大路振一	三・一		ロマン・ロランと私	松居 直
		ユダヤ民族と西洋文明	岡本 清一				

4・19	(財) ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念 レクチャー・リサイタル 杉田 谷道	10・15	『魅せられたる魂』を語る(後)	重本恵津子
6・4	ベートーヴェン後期ピアノ・ソナタの夕べ” ロマン・ロランとベートーヴェン 青木やよひ	1・28	いま、ロマン・ロランを語る	
9・27	ロマン・ロランとデュアメル 村上 光彦	9・9	ロマン・ロランと音楽 尾埜 善司・今江 祥智	中野 雄
10・25	ロマン・ロランの思想の二面性 兵藤正之助	10・14	神秘と政治 ロマン・ロラン、その思索と行動の あいだ B・デュシャトレ	
11・29	初めにロマン・ロランあり 岡田 節人		ロランとフランス革命 河野 健二	
一九九二	〈大洋感情〉と宗教の発端 岩田 慶治		自然科学とゲーテ 岡田 節人	
6・26	ロマン・ロランとイタリヤ 戸口 幸策	12・3	ロマン・ロランとドイツ音楽 ——ベートーヴェン、デュカ他作品	岡田 暁生
9・25	ロマン・ロランの革命劇をめぐる 鶴見 俊輔		ピアノ演奏…小坂 圭太	
10・30	宮本正清 没後十年記念追悼会 ピアノ演奏…山田 忍	12・24	おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日まで」 で 映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)	今江 祥智
11・27	静かにやさしき顔 佐々木斐夫			
	不思議な静けさ——宮本正清の世界 小尾 俊人			
一九九三	自伝的諸作品について 佐々木斐夫	一九九五		
1・29	ロマン・ロランの演劇的世界 石田 和男	1・27	ロマン・ロランと日本人たち 私の歩んだフランス文学の道 片岡 美智	小尾 俊人
5・24	ガンディーとロマン・ロラン 山折 哲雄	6・2		
6・23	『魅せられたる魂』を語る(前) 重本恵津子	11・10	ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺 岡田 暁生	

一九九六	ロマン・ロランとの出会いから	鄭 承姫	10・30	ロマン・ロラン記念コンサート	ピアノ演奏…小坂 圭太
6・14	レクチャーコンサート	岡田 暁生		ピアノ演奏…岡田 暁生	
11・16	ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番	ピアノ演奏…北住 淳	11・25	ロマン・ロランと大佛次郎	レクチャー…岡田 暁生
11・18	「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン	本山 美彦	一九九九	ロランと音楽	村上 光彦
一九九七	「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと		6・11	「日本ロマン・ロランの友の会」五十周年記念	岡田 暁生
1・17	魯迅	區 建英	10・8	園田高弘ベートーヴェンを弾く	園田 高弘
6・6	わが青春と一生	岩淵龍太郎	12・1	お話とピアノ演奏	森本 達雄
9・19	ロマン・ロランと結核の時代	福田 真人	二〇〇〇	ロマン・ロランとインドの精神	
10・4	ピアノとチェロのための夕べ		10・13	ロマン・ロラン没後五十五年と日本	佐々木斐夫
	ピアノ演奏…北住 淳		二〇〇一		
	ロマン・ロラン記念コンサート		2・23	ロマン・ロランと〈老いの豊かさ〉	青木やよひ
	チェロ演奏…小川剛一郎			シンポジウム	今江 祥智
一九九八	ロマン・ロランと種蒔く人	柏倉 康夫	6・23	(財)ロマン・ロラン研究所設立三十周年記念	尾埜 善司
6・8	ロマン・ロランと政治的魔術からの解放			コンサート	神谷 郁代
9・25		柳父 罔近		「神谷 郁代 ベートーヴェンを弾く」	

12・21	ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー	二〇〇四	『きょう』を読む『京都、半鐘山の鐘よ 鳴れ!』 朗読とおはなしの会
	デイディエ・シッシュ	5・29	おはなし 尾埜 善司 朗読 村田まち子
二〇〇二	ロマン・ロラン記念スプリングコンサート ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ	7・16	ロマン・ロラン記念サマーコンサート 演奏…ピエール・イワノヴィッチ 郁子・イワノヴィッチ
4・20	ロマン・ロランの後継者たち		抗日中国における中仏文化交流 中国の知識人はロマン・ロランをどのように評 価したか
11・11	ロマン・ロランの作品による音楽とレコード	9・11	現代の法とヒューマニズム 加古祐二郎と瀧川事件 ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート 梅原ひまり 神谷郁代デュオ ヴァイオリン演奏…梅原ひまり ピアノ演奏…神谷 郁代
二〇〇三	演奏…ピエール・イワノヴィッチ 郁子・イワノヴィッチ	二〇〇五	生々発展する魂 ゲーテとベートーヴェンそしてロマン・ロラン
4・19	ロマン・ロランの作品による音楽とレコード	1・29	青木やよひ
5・10	尾埜 善司		
5・31	戦争と平和、科学を考える プリーモ・レーヴィを語る	6・12	
	ジル・ド・ジエンヌ		
11・22	ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える 峯村 泰光	6・25	

10・29	交差する肖像	村田まち子・宮本エイ子
	ロマン・ロランとクロードル	
11・24	戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン	今藤政太郎
二〇〇六		
	J・F・アンス	
	通訳 原口 研治	
11・6		
	山口 俊章	
二〇〇八		
3・8		
1・20	日本におけるロマン・ロラン受容史	親子で読む・聴く『ジャン・クリストフ物語』 会員たち
二〇〇七	シッシュ・ディディエ	
	通訳 シッシュ由紀子	
	琴 笙 ヴァイオリンによる新春コンサート	中国におけるロマン・ロランの紹介者・傅雷 榎本 泰子
	大谷 祥子	
9・16	豊 剛秋・増永雄記	前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演
	歌・下郡 由	ロマン・ロランと日本人たち 尾埜 善司
2・3	歌と朗読の会	ロマン・ロラン国際平和シンポジウム
	「ピエールとリュース」朗読	宮本正清の詩『焼き殺されたいとしらへ』
	尾埜 善司 ほか 会員	「わらい」朗読 尾埜 善司
7・21	朗読の会	フランソワ・ラベット
	第一次世界大戦とロマン・ロラン	ロマン・ロランが愛したベートーヴェン
	そして『母への手紙』	ピアノ演奏…神谷 郁代

朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』

ピアノ演奏…岩坂富美子

朗読…下郡 由ほか

「日本・ロマン・ロランの友の会」六十周年記念

西垣正信 レクチャー・ギター コンサート

フー・ツォン ピアノリサイタル

犠牲の宗教への問い 高橋 哲哉

読書会報告

これまで同様、原則として第四土曜日、午後二時から四時まで。ロマン・ロラン研究所で開催。ロマン・ロランの作品を選んで報告者が要約、問題提起をしながらの自由討議。

作品…芸術研究『ヘンデル』—没後二五〇年に寄せて
…自伝『内面の旅路』

五月、六月、七月、九月、十一月、二〇一〇年一月、二月、三月の七回、二七六回から二八三回、友の会から数えると四五八回を終了。

報告者、清原章夫、黒柳大造、西尾順子、山本和枝

(敬称略)

延べ参加者、一〇五人。

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六―一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、真に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頹廃から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

●講演会

●読書会・研究会

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また

●彼の周辺の芸術家たちに興味、

●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●特典①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●会員①一般賛助会員は年会費一口五千元から。特別賛助会員は年会費十口以上。

(アルファベット順・敬称略) * 特別会員と同等の寄付者

— 75 —

『ユニテ』編集を終えて…

この一年「チェンジ」のキャッチフレーズが世界を駆けめぐり、「改革」の文字が日本のマスメディアや政治でも取り上げられてきた。

本研究所の理事会でも、会のあり方や未来のあるべき方法が論じられている。ロマン・ロラン研究をさらに前進させ、その精神を基調とするより広い活動が望まれている。たとえば、ロランが希求してきた平和の問題、ヒューマニズムの観点に立ち、戦争に反対する活動がある。魂の鼓動としての音楽がある。

その新しい試みの第一歩として、靖国問題にも積極的に活動されている哲学者、高橋哲哉さんをお招きして講演会『犠牲の宗教への問い』が開催された。その講演記録を本誌巻頭に掲げることができてうれしく思う。日本のキリスト者の一部が戦争協力者となった事実から、「宗教」と「犠牲の血」の意味について鋭く究明され、考えさせられる点が多い。今後ロマン・ロランが求めて止まなかった「平和」を、私たちの問題としてさらに

深め、広げていきたいものである。

音楽については以前から音楽会の開催など広い活動をおこなってきたが、今回は「友の会」六〇周年記念にフー・ツォンさんをお招きして演奏会を開くことができた。その経緯や会員の声を本誌でも載せている。時代の変動と苦難の歴史をのりこえて、その感動を伝えることができたと思う。

そのほか、この一年も様々なできごとがあったが、変化は少しづつだが始まっている。ロマン・ロランの作品が日本でもベストセラーであった時代を知る人は少なくなかったが、彼の精神の輝きは決して消え去るものではない。

私たちが受取った炬火は、方法としては変化しても、さらなる深まりがあり、広がりの中で引き継がれ、さらに大きな炬火として燃え上がっていくものでありたいと願っている。

本号でも、村上光彦先生を始め大勢の方々から玉稿をいただいた。心から深く感謝の言葉をささげたい。

(文責 野村)

…追記…なお、本号の編集を終わり、印刷の段階で計報が伝えられた。ロマン・ロラン研究所理事として創立時より関わり功労者の一人であった佐々木昌義（斐夫）先生ご逝去（三月十三日・享年九十六）のお知らせである。先生は本研究所の理事会へは成蹊大教授を退任後も東京からわざわざご出席されていた。近年は居を京都に移され、最長老としてご助言をいただいた。

次号で追悼の記事を掲載したい。生前の功に感謝するとともに、先生のご冥福を心からお祈りしたいと思う。

編集部

小尾 俊人

中西 明朗

西村七兵衛

野村 庄吾

宮本エイ子

ユニテ
第三十七号

発行日 二〇一〇年四月二十二日

発行者 (財) ロマン・ロラン研究所

理事長 西成勝好

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六―八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所 (株) 北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>

E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp

U N I T É

Numéro spécial

60ème anniversaire de la fondation de l'Association japonaise des amis de Romain Rolland

Sommaire

Interrogation sur la religion du sacrifice	Tetsuya Takahashi
Romain Rolland (1866-1944) musicologue	Mathias Roger
	Traduction: Manabu Ohide, Ikuko Ivanovitch
Rapport sur le récital Fou Ts'ong (傅聰)	
Entretien	Katsuyoshi Nishinari
Impressions du récital Fou Ts'ong (傅聰)	Akio Nakanishi Eriko Moriuchi
<i>Au seuil de la dernière porte: réflexions (suite)</i>	Mitsuhiko Murakami
À la mémoire de Yayohi Aoki	Kazuko Nagata
Compte-rendu des activités de l'Institut Romain Rolland	Eiko Miyamoto
Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland	
Annuaire 2009 des membres et donateurs	
Postface	Shōgo Nomura